

501  
4

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始



34505

50/4

GOETHE  
UND  
SCHILLER



著譯經盈正  
版·堂·陽·浴

大正  
10 3. 4  
内交



像立豪文二  
ルレルシ(右)テエグ(左)

## 序

Nietzsche は、「教育は、生ける百科全書を作るに過ぎず」と、教育の一般的弊竇を嘲笑し「人類の目的世界の目的は天才を造るに在り」と喝破した。而して彼が天才として許した者に、わが愛する Goethe がある。Nietzsche の徒が Schiller を「道徳喇叭手」と冷罵し、近代の Sturm und Drang 派の人達が此れに和した所で「天才の九分は勤勉に在り」と云ふ、Goethe が Schiller を重んじ「真に人らしい人であった、誰も彼の如くありたいものだ」などと、賞揚してゐては、Carlyle が「Byron を捨て、Goethe を読め」と叫んでも、その Goethe が、Eckermann などに「Byron を読め」と勧めて居るので、Carlyle の言葉が弱く感じられると同じく、直に、Nietzsche の言を無條件に容れることを躊躇するの念を禁じ得ない。Nietzsche が Jesus Christ や Socrates やを愚者と云つたとて、彼等を愚者と思ひ得ない如く、吾々は、

Schiller の大才を認めて、これを單なる道德の喇叭手と嘲笑し去ることを好まない。自ら、因襲的皮相的道德に反抗し Nicht-Christ であると公言した所の Goethe は、Nietzsche が觀て以て好んだに相違ないが、その Goethe の態度に反感を持たなかつた Schiller であることを考へる必要がある。Goethe が、クリスト教徒の中で最も眞のクリスト教徒は俺だぞと、一千八百三十年頃に思つたことを考へてみなければならぬ。

◎ George Henry Lewes 氏、Goethe 傳の、はじめに、Quintus Curtius は或季節に於て Bactria が塵埃の旋風で暗くせられ、道筋が隠される。かくして目標を失つた漂流者は、星の上るのを待つ。文學の上にも、時々、時代の塵芥の爲めに、足を痛めた旅客が、隠された道を探し苦しみ、疲勞に耐へられなくなる。かやうな場合 *Be-trials* に倣つて、時代の紛糾から眼を轉じて、前時代の偉人を觀、それらの光明に指導を得たい。いつの時代でも、偉人傳は、少からぬ教訓を與へ、且又、高尚なる

大望に對して、有力なる刺戟物である」と云つて居る。眞に、Goethe の如きは、時代の塵芥の旋風に合つても、なほ、隠れないほどの偉大を保つて居る。彼の歿後、彼の非難を耳にせず、彼は漸次、聲價を高めて來る。吾人は、彼の放つ光を、闇夜の漂放者に仰がせたい。

Goethe と Schiller とは、獨逸文學黄金時代の巨星であつた事は、云ふまでもなく、長くその國に輝くのみならず、世界の文學に光を投げた。予は、此の二文豪の傳を作るに當つて、その著述の紹介に、多くの紙數を分つた。それは Goethe が「著述家は、其の著述中に多少自身の肖像を描く、縦し、それが自己の意志に反して書く時でも」と云つた言葉通りに、著述家は、その著述中に、自己を描くものであるからである。而して特に此の二文豪の如きは、その著述に、自己を全く投入したものであり、その著述を放れて、彼等を論ずるは、木の幹を外にして、枝葉に就いて云ふものゝ如くなるを以てである。されば「ゲエテとシルレルとの生活及び著述」と題

することの適的なるを思はないでもないが「ゲエテとシルレル」の短きを採つた。

なほ、Goethe の戀愛方面に關して、彼が愛情を注いだ十五婦人を選んで、「戀のゲエテ」と題して既に洛陽堂より公にしたものを併せ讀まれることを希望する。何となれば此の書を著すに當り、彼の書に繁にしたものは此の書に於て疎にしたからである。本書中、人名と地名とは、それを表すに、假字を以てする時は、多く完全を期し難い。例へば、Stein にしても、「スタイン」「シタイン」「シユタイン」等が世間に用ひられて居り、Goethe にしても、「ギョオテ」「ゲーテ」「ゴエテ」等の文字が世間に用ひられてゐる。これらがそれを證するものである。予は「ゲオエテ」を用ひんかと思つたが、最も廣く行はれてゐる「ゲエテ」に随つたのである。それ故、重要な人名、地名には、獨逸の綴字を附しておいた。なほ一言附記すべきは、予が、Schiller の Wallenstein を、漫然一讀したのは、凡一歳の前であり、本書を成さむとするに當り、その書を予が書庫に見出し得なかつた爲めに、詩友、藤森秀夫君の援

助を得たことである。こゝに同氏の勞を謝しておく。Schopenhauer の名句に「天才は大洋にも似て深い、これを測らうとする場合、各人は、自らの測深錘の達する限度までしか測り得ない」と云ふのがある。此の二文豪に對する予が見解も予の測深錘の達する限りを出ないのであるから、更に深い測深錘を垂れる人の出現を待つ。

一九二〇年冬、東京市外、澁谷にて

ゲエテとシルレル目次

第一篇 ゲエテ

一 早熟兒、ヨハン・ラルフ・ガング・ゲエテ……………一

二 ライプチヒ遊學と病氣に因る歸郷……………一八

○三 『戀する人の機嫌買ひ』と『同じく罪人』と……………二四

四 シユトラスブルヒ遊學、辯護士開業……………三七

五 エツツラル時代……………五一

六 『ゲオツツ・フォン・ベルリツヒンゲン』……………五七

○七 『若きエルテルの悲み』『ステルラ』……………七八

八 『クラキゴ』……………九〇

九 リライとの戀……………九九

一〇	ワイマル入りとその地に於ける彼の生活、瑞西旅行……………	一〇六
一一	「エグモンント」……………	一一八
一二	「タウリスに於けるイフイグニエ」……………	一二九
一三	自然科学と彼の人生観……………	一五五
一四	伊太利旅行……………	一六四
一五	クリスタアアネの貞淑、シルレルの覇氣……………	一七一
一六	「トルクアアト・タツソオ」……………	一八一
一七	病める二詩人とシルレルの死……………	一九七

第二篇 シルレル

一	羸弱鋭感の小童ヨハン・クリストフ・フリイドリヒ・シルレル……………	二〇七
二	カルル學校在學中の苦悶、初めて觀たゲエテ……………	二二五

三	「群盜」……………	二二六
四	出 奔……………	二五六
五	「ゲヌアに於けるフイエスコの謀叛」……………	二六二
六	マンハイムの貧窮生活……………	二八二
七	カルプ夫人との交情、ワイマル公の前に於ける朗讀……………	二九二
八	ドレスデン時代……………	二九八
九	「たくみと戀」……………	三〇八
一〇	小説「失はれたる名譽からの犯罪者」と「神降しする人」……………	三三三
一一	「ドン・カルロス」……………	三三〇
一二	ワイマルに於けるシルレル……………	三四四

第三篇 ゲエテとシルレル



一	エナに於けるシルレル、ゲエテとの親交	三五
二	ゲエテシルレル相互の愛重	三七
三	活動して息まざるゲエテ、ナポレオン軍のワイマル侵入	三八
四	老いて元氣旺盛なるゲエテと其の死	三九九
五	ゲエテの「ヘルマンとドロテア」	四二〇
六	ゲエテの「撰擇親和力」	四四〇
七	シルレルの「ワルレン・シユタイン」	四五七
八	シルレルの「鐘の歌」	四九九
九	シルレルの「マリア・スチユアルト」	五三五
〇	シルレルの「オルレアンの少女」	五七八
〇	シルレル「メツシナの花嫁」	六〇七
三	ゲエテとシルレルとの詩	六二八

368

挿 畫

三	シルレルの「キルヘルム・テル」	六六九
四	ゲエテの「キルヘルム・マイステル」	七〇六
五	ゲエテの「ファウスト」	七四五
	ゲエテ年譜	七八九
	シルレル年譜	八〇五
	ワイマルに在る二文豪立像	巻頭
	ゲエテ	五〇
	ゲエテの筆蹟	二二七
	シルレル	二〇六
	シルレルの生れた家	二二四

シヤルロツテ・ラルツオゲン	二八六
マルガレエテ・シユワン	三〇三
シヤルロツテ・カルブ夫人	三三三
シヤルロツテ・レンゲフェルト	三八三
シルレルの Silhouette	四五七
シルレルの死顔	五三五
オルレアンの少女	五七七
ゲエテ	六二七
ミニヨン	七〇七
ヘレネ	七三三

# ゲエテとシルレル

正富汪洋著



ヨハン・チルフガング・ゲエテ

十七世紀の中葉、獨逸のテュウリンギア Thuringia の、マンズフェルト Mansfeld 伯領地アルテン Alten村（ワイマル Weimar から、二十哩ばかり北）の僅少の住民の中に、ハンス、クリスチヤン、ゲエテ Hans Christian Goethe と云ふ、蹄鐵工があつた。其の子の、フリードリヒ・ゲオルヒ Friedrich Georg は、裁縫職人として、仕込まれた。フランクフルト、アム、マイン Frankfurt am Main に移り、そこで忽ち

その職を得、又、婦人と交際する事の巧な人であつたので、裁縫所の主人、セバス  
ティアン、ルツツ Sebastian Luts の娘に好かれ、親の承諾を得て、これと結婚し、フ  
ランクフルトの市民権と、裁縫人教導の任とも譲られた。収入が月々殖えるのを  
楽しんで居る間に幾人かの子が生れたが、その子等は不幸にも死んでしまひ、一千七  
百年に妻も不歸の客になつた。後五年にして同業者ゲオルヒ・ウアルテール Georg  
Walter の娘で、當時三十七歳の寡婦であつたコルネリア・シエルホルン Cornelia  
Schellhorn と結婚し、その所有に屬するホテル、ワイデンホーフ Weidenhof の主人に  
なり、裁縫用具を置いて、旅宿主人として前掛ヘイブリンを着けた。二人の間に、三人の子が  
あつたが、——十年七月誕生の三男、ヨハン・カスバル Johann Kaspar は健全に育  
つたので、これに法律を學ばせて、市の要職に就かせようと、先づコオブルヒ Cob  
urg の高等學校に送つた。カスバルがそこで修業中、父は、一千七百三十年、七十  
三歳で死に、後數年に兄も死んだ。カスバルは、ライプチヒに法律を學びエツツラ

ルの大審院で實務を練習し、ギイセン Giessen の大學に移り、法學士となり、後、  
伊太利に遊び、珍らしい書物、版書の類を携へて、フランクフルトに歸り、帝室評  
議員にして貰つた。彼は、やゝ、術學的で容易に激怒する僻があつたけれども、正  
直で、智識を喝望し、法律によつて、一層、峻嚴に導かれたものらしく、時には冷  
酷とまで思はれるやうな態度を示したが、藝術、文學にも、又少からざる趣味を有  
し、伊太利の、其等に心を寄せ、タツソオの詩は、愛讀書の一つとして知られて居  
た。

カスバルは一千七百四十八年、三十八歳の時、カタリナ・エリサベット・テクスト  
ル Katharina Elisabeth Textor としよぶ、十七歳の、市長の娘と結婚した。二人の間  
は、はじめ戀らしいものはなかつた。カスバルは、裁縫師の子である故に、門閥の  
高い市長の娘を妻に貰ふことは、社會的位置を力附けると思ひ、市長の方では、裕  
福な生活の中に、娘を置きたかつたのであつた。市長は、ヨハン、ヤルフガンダ、テ

クストル Johann Wolfgang Textor と云ひ、一千六百九十三年生れで、法律を修め  
帝室大審院の全權辯護士の娘を妻に迎へた。四人の女子の中の、長女（一千七百三  
十二年生）カタリナは、天性愉快な女で、人の美點を探し出し、悪い點を見棄て、  
何事でも、圓く納まるやうに扱ひ、直覺的に世態人物を正しく視、明らかにそれを  
表現し得、親切で、高尚で、敏活で、穩和で、豊かな空想を有ち、神を愛し苦境に  
立つても忽ちに神を信じて快活になつた、話し好きでお伽話を幾つも知つてゐた。  
カタリナの腹から一千七百四十九年八月二十八日正午に、フランクフルト、アム  
マインに於て一子が産れた。重産であつた上に、産婆が、極めて拙劣で、赤子の顔  
は、鬱血のために蒼黒く、死兒かと疑はれた程であつたが、これこそ、世界の詩聖  
となつたヨハン、ワルフガング、ゲエテ Johann Wolfgang Goethe であつた。

カスバルは、實母と、ヒルシユグラアベン Hirschgraben 町に住んでゐた家へ、新  
婦を迎へたのであつた。この古い家は二つの續いた家から出来てゐて段梯子によつ

て高さの異つた部屋部屋へ導かれてあつた。一千七百五十四年に、カスバルの實母  
が亡くなつてのち、間取などに變更が行はれた。ワルフガングの後に、六人の子供  
が出来たが、夭折して、彼より十五ヶ月若い妹の、コルネリア Cornelia が、長ら  
へた。此の二人は睦まじく成長した。兄妹は、遊ぶのに適した廣い祖母の部屋によ  
く在つた。祖母は一千七百五十三年のクリスマスの晩にダヴィット David とゴリア  
ト Goliath との人形芝居を、兄妹に見せ、しまひには操縦することを許した。これ  
が、どれほど、小さい詩人を喜ばせたことか、これが、彼に大きな影響を與へた。  
母は、また、年長で、少々變人の夫よりは、子供の方を、好み、特に愛らしい長  
男と親んだ。父は閑散であつた上に、教へることが好きなので、若い妻や、子供に  
自ら讀書その他を教へた。幼い二人は、父が、遊びたい盛りを、遊ばせずドンド  
ン長い時間を教へこむのには閉口した。一千七百五十五年のクリスマスには、母が  
指定して製造した人形芝居、それは、この前のものより、ワルフガングの年齢に相

應するだけの興味を持たせたものが、彼の家で行はれ、彼の友人達が彼の部屋に集つて見た。舞臺は續いた部屋の戸の側に設けられたのだ。これが非常に子供達を喜ばせ、特に、彼は、喜んだが、その秘密を知らんことを欲し、忽ちにしてその構造を悟り、母に乞うて、言葉及び舞臺に關する書物と共に、一切のものを母から貰つた。かくして、幼年時代から彼は劇に親んだ。この年の十一月、リスボンに大地震があつた際にも、彼は、神の慈悲が、果して廣大公平であるかを疑つたといふ程であるからこの人形芝居の如何にして、製造せられてあるかに、心を留めたのもこの穿鑿好きの早熟な童兒には、珍らしくもない。

父は、彼の子の爲めに、又、近隣の子の二十人ばかりの爲めに、家庭教師を雇ひ來り共同教授をすることに盡力した。その教師から、古代語のラテン、ギリシヤ、ヘブレエ三國語を學び、其時代のイギリス、フランス、イタリア三國語を學び、地理、歴史、宗教、自然科學、數學、圖畫、音樂、舞踏、擊劍まで教へられた。自國

の國語教育といふことは、その頃、行はれなかつたのだ。

彼の家に入出入するものは、皆彼の、伶俐と風采とを愛した。シユナイデル *Schneider* といふ評議員、スタルク *Stark* といふ牧師、オオレンシユアラゲル *Olenschlag* だの、ライネツク *Reineck* だの、モリツツ *Moritz* だのと云ふ人々、何れもこの童兒の將來の發展を思つて、望みを懸けたらしい。かく、望みを掛けられると、自尊心が強くなる、彼の自尊心は、彼の發展とともに著しい。

彼は、コリネリウス・ネボス *Cornelius Nepos* を硬く苦しいと厭ひ、新約聖書や、チエラリウス *Cellarius* や、パゾオル *Pasor* を平凡で興味を呼ばないとし、詩を愛讀し、日曜毎には、友人と自作の詩を比べて、他の兒童が、彼同様に、自作に自信を持つて居るのに對して、自分もあんなのでは困る謬妄を謬妄と悟らないでは、危険だと思ひ惱んだりしてゐる。その頃は、子供の爲めの續刊讀物が無かつた。僅にアモス・コメニウス *Amos Comenius* の *Orbis Pictus* があつただけで、淋しかつた。

彼は、聖書の中の銅版書を愛し、ゴットフリート Gottfried の年代記を愛讀し、オ  
ギッド Ovid の『變形』を飽かず反復した。フェヌロス Fenelon の『テレマツハ』  
Telemachus の翻譯『ロビンソン・クルウソ Robinson Crusoe』『フェルゼンブルヒ  
Falsenberg の島』や、アンスン Anson の『世界廻航記』なども、彼の手に上つたが  
フランクフルトで、通俗本、Volkschriften, Volksbücher が出版せられ、菓子を買ふ  
程の小錢で、『ハイモン Haimon の四子』『美しいメルシイネ Melusina』『美しいマデ  
ロオネ Margelone』などが求められるやうになつてから、彼はこれを貪り讀んだ。彼  
が、この廉價な本の『フォルトゥナアトウス』Fortunatus を求めた際に、病氣に罹  
つた。これは疱瘡であつた。彼は又、麻疹にも風痘にも罹つたが幸に命をば落さな  
かつたが、嚴格過ぎる父は、子の病氣から回復するかしないかに、日課を作つて、  
早くも、注入教育を施さうとした、彼は、自分で、自分の進路を或程度まで、開拓  
しようとしてゐたので、少々迷惑した。彼は、この壓迫を逃れて祖父母の住んでゐ

る、フリードベルヒ Friedberg 街へ行き、又、母の妹に當る人達の嫁いで居る家へ  
も遊びに行つた。或叔母の所で、ホメエル Homer を手にして喜んだ。

一千七百五十六年八月二十八日、彼が満七歳に達するか達しないかの時に、有名  
な七年戦争が始まつた。マリアテレシヤ Maria Theresia がシユレジエン回復を企て  
國力を養ひ、ロシア、フランス等と結び、プロイセン分割を謀るに當り、フリード  
リッヒ Friedrich 二世は、機先を制し、兵六萬を率ゐて、ザクセンに侵入した。こ  
ゝに於て、兩方の中どちらか一方を味方するのが人情である。彼の祖父はマリア・  
テレシヤ側に、父は、プロイセンの方へ味方をした。それが爲め、やゝ不和になつ  
た。彼は父の方に賛同し、勝利の報に接すると詩を作つた。そして毎日曜日に祖父  
母の所に食事する樂みが、減じられた。その理由は、フリードリッヒ二世が罵られ  
たからだ。戦争の續いて居る間、子供は、家の内に引き留められ勝ちであつた故彼  
は、近所の子供を集め、人形芝居を觀せた。自分で、色々の芝居を作り人形を造つ

た。そして後には、友人達と色々の人物に扮して、素人芝居を演じた。それに使用する武器なども、可なり澤山製作した。彼は、こんな方面では、勿論、支配者で、ありお伽噺をして、友人達をも喜ばせた。

彼の自尊心は、彼の態度に表はれ、彼を崇び親まうとする友人もあつたが彼を憎む児童もあつた。或日のこと、教師が来ない一時間があつた。その際、はじめ、一切の子が居た間は、一同格別、争ひもしなかつたが、彼に好意を有つ友人が待ちあぐんで出て行つた後で、彼を憎んで居る三人が、幸に虐めてやらうと、しめし合せて、室外で箒を壊し箒を作り、來つて彼の脚や腓を打ち始めたが、彼は、程無く時計が打つまで辛抱してゐて、それから反抗しようと思つて、なすまゝにして置き一人の頭を脇腹へ壓しつけ、左手で、残る一人を引倒し彼等を苦しめた、彼等が聲を立てたので、家人が集り、事情を糺すに至つた、彼は、脚に受けた箒の痕や、散

亂してゐる、箒を證據に彼等の暴舉を訴へた。その時彼は、今後、誰でも、僕に對し亂暴すれば目の球を刮り出してやるぞと云つた。そしてその家を出て勝誇つた氣分で歸つたが、それ以來、共同教授が漸次不振になり、後には廢つたと、彼後年、自傳中に記して居る。

彼の父は、詩を愛し、繪を愛し、部屋に伊太利人の描いた風景畫などを掛けて樂しみ、又、自國の畫家にも度々描かせ、書庫には、詩集も並べて置いた。早熟の彼は、父の書庫から、カニイツ Canitz や トレンミン Tleming や ベッセル Besser や ドロリッゲル Drollinger や ゲレルト Gellert や クレイツェン Creuz や ハレル Haller や ハアゲドルン Hagedorn を読み、又ノイキルヒ Neukirch のテレマツハ Telemachus の押韻した譯本や、父が愛讀する伊太利のタッソ Tasso の「釋放せられたエルサレム」La Gerusalemme Liberata のコッペン Koppen の譯本や、その他を精出して讀み、妙所を暗記した。それ故、時々客へのもてなしの一方法として、客の前で、

誦讀させられた。彼の父は、クロプストツク Klopstock の「メシヤス」Messias を詩らしくないとして、世間の評判の良いのに係らず、此の書を家に入れなかつた。所が懇意な出入者のシュナイデルが、父親に秘密で彼と妹とに持て来て遣つた。

兄妹は、隠れ隠れ、それを讀み、ボルシヤ Porcia の夢を誦讀し紅海に投込まれたサタン Satan とアドラメレク Adramelech との絶望の對話を、前者を兄後者を妹と分けて誦記して、時々、演劇的に試みてゐた。或冬の土曜の晩、父が明朝教會へ行くと、理髮師に髭を剃らせてゐる場合、兄妹は暖爐の脊面の足臺に腰をかけて、いつもの通りに、その對話を小聲で始めた。所がつひ／＼言葉が高くなり、彼女が

あゝ如何に私が碎かれることよ——

と叫んだのが、父達を驚かせ、秘密讀書が曝露してしまひ、その書物はいよいよ嚴禁せられたといふ話もある。

このフランクフルトは、帝王直轄の獨立市で人口は三萬ほどであつたが、北獨逸

中部獨逸の要衝地で、交通貿易の中心で、年々、クリスト復活祭及びミカエル祭には市が立ち、諸方の人が集つた平素と雖も、ライン川と北からの大道路が旅客を運び英、佛、兩國からも來る者が相當多くあり、歐洲の縮圖、商業の勸工場の觀を呈した地方會議も開かれることが例になつて居り諸侯の常置領事もあり、又、古めかしい中世紀の城壁が圍んで居り、過去を物語る紀念物が多く残つて居り、猶太人の僑居もあり、過去を代表するものと、その頃の理想たる實業主義を代表するものとの混合を示した。かやうな時にかやうな所に此のコモスポリタン、ポエツトの生れたのは最も適當であつたと謂ひ得る。彼は、この紛糾錯雜せるあらゆる方面に、透視的眼光を放つたのであつた。

一千七百五十九年一月、フランス兵に依つて、フランクフルトが占領せられて終つた。七千の軍人は、諸家に宿泊し、必要品を徵發した。彼の家には王室歩兵中尉伯爵トラン Florane が宿つた。この人は義俠的穩和な人で、佛兵滯在中、市民と佛



兵との間に起る争論の仲裁が任務であつた。藝術に興味を有してゐたので、佛蘭西の別墅用にと、この地の畫家を招いて、彼の家で畫かせた。又、佛蘭西の俳優で、この地で開演して居る連中が訪ねて来る、争を訟へて来るものもある、これらの出入の繁いのが、彼の父の機嫌を痛く損じた。勿論、プロイセン最負が、厭忌の根本になつて居たのだ。父の不機嫌に係らず、オルフガングは、かやうな變化が彼を刺戟し、興味の材料になるのを喜んだ。見るもの聞くものが新印象を與へる。繪を畫く様を注意する、争ひ事を偷み聽きをする、演劇を觀ようと劇場に往くと云つた風に、多忙であつた。はじめには、劇場に入つても、よく解らなかつたが、段々解るやうになつた。軍隊と一緒に來た佛蘭西女優の子のド・ロスヌ De Rosne と云ふ少年と懇意になり、樂屋へまで連れ込まれた。その時分、熱心に、モリエル Moliere だの、ラシイヌ Racine だのものを全部讀んだ。自尊心の強い彼は、十二歳の小童であるに係らず興行してもらふつもりで、脚本を書いた。彼は、かやうに、佛蘭西劇、

佛蘭西舞臺からこの方面の知識を進めた。佛蘭西語にも、面白味を増して來たので、これで、文章を作つて父に見せた。父は子の早熟に喜んだ。彼はまた英國語をもラテン語をも精出して學んだ。彼の父は、運動して、トランを他家へ移してしまつた。一千七百六十三年、英と佛との間に、パリの和議が成立し、その一條件として、佛は獨逸より撤兵したので、塊は獨力で戦を續け得ず、同年、フベルツスブルヒの條約を締結し、各邦の境界悉く舊に依る事となり、プロイセンは選舉侯として、マリア・テレシアの子、ヨゼツフ Joseph II に投票することを約し七年戰役が終つた。そして——六十四年春、ヨゼツフのロオマ王になる選舉式と戴冠式とがフランクフルトで舉行せられることになつた。その前から、小諸侯が来る、大諸侯が大使を派遣するといふ有様で、此の市が非常に賑つた。彼は市長の孫であるので、これらの儀式を觀るのに、便宜な地位にあつた。この儀式の前から、彼は、市のやゝ下等な少年達と交際して、それらの人に頼まれて、艶書の代作をした。そんな關係で、そ

これらの人達と、一タ、仲間の一人の居る家で酒を飲んでゐると、十四歳の彼より数歳上の、グレットヘン Gretchen といふ少女が現はれた。その姿が可愛らしいので、彼は、それを戀ひ慕ふに至つた。

四月三日の即位式の夜、愛し合つてゐる二人は、腕と腕とを組合せて、電燈で飾られてゐる市街を歩き廻り、歡樂に酔つた。

はじめ、それらの友人達と遊んでゐた際、一人の青年が、彼の外祖父に紹介して市の役員にしてくれと頼んだ。彼がそれを引受けたが此の男が、文書偽造などの悪事に關係してゐることが發覺し、彼も關係があると見込まれ、評議員のシユナイデルが、その觀樂の翌朝、調査に彼の家に來た。彼は友人達の上に不幸の來ることを悲んで家に籠つて鬱々としてゐた。後、友人達が調べられ、グレットヘンも調べられた。その際、彼女は、彼を子供であるのだから悪事に手を出させないやうにしたと陳述したと聞き自尊心の強い彼は、あれほどまでに思つてゐるのに、彼女は子供

扱ひにしてゐたのかと憤慨して終つた。この女はこの市の者でなかつたので、その生れた所へ歸つてしまつた。これが彼の初戀であつた。

## ライプチヒ遊學と病氣に因る歸郷

少年にして、既に、ラテン、ヘブレエ、フランス、ドイツ等各國の詩を直接又は間接に大方讀破し、又、外國の脚本をも讀破り、「宗教と詩との中に哲學が含まれてゐる故、更に哲學を要しないではないか」との間を發して、家庭教師をして、答辯に躊躇させた彼は、法律よりも、文學を好んだ。そして詩人として立ちたいと願つたが、父はそれを許容しないで、ライプチヒ *Leipzig* 大學に法律を修めさせようとした。乃ち父の命に従ひ、一千七百六十五年九月末家を出て十月初旬に目的地に達した。

このライプチヒは當時フランクフルトとは同様の面積であつたが、遂に都會化して居つた。彼は此地の人々の自由と輕快な態度とを喜んだ。大學の講義は、どれも興味を起させない法律などはフランクフルトで學んだものから一步も新しいものを

を聽き得なかつた。彼は表面、法律を學ぶことにしてゐたが、實際は、法律には熱心でなかつた。他の講義を聽きに出た。博言學者で聖書批評に名のあるエルネスチイ *Ernesti* 教授も彼を失望させ、評判の良いゲルレル *Gellert* の、修辭學と獨逸文學の講座も、術學的で、陳套で、興味を呼ばない。歴史教授のビヨオメ *Boehme* が親切にして呉れ、その夫人が彼を愛した。愉快な教養のある婦人で、彼のフランクフルトの言葉訛りや、衣服について注意を與へ又彼の得意の詩を聽いても、それは拙いと評價した。こともあつた。それ故、しばらくは詩を作らなかつたが、ライプチヒに在る間に『戀する人の機嫌買ひ *Die Laune des Verliebten*』と『同じく罪人』*Die Mitschuldigen* 其他小曲を成した。

一千七百六十六年、フランクフルトの一友人ホルン *Horn* が、法律を學びに來た。これとは互に心を打開けた。その後、又、友人、シエロツセル *Schlosser* が、ウエルテムメルヒ *Wuerttemberg* の公爵、フリドリヒ、オイゲン *Friedrich Eugen* の秘書

として、トレプトウ Trepow に往くに當つて、此の地へ來た。この人は後に、彼の妹婿になつた。年は彼より十歳程の兄であつた。強壯で獨立心の盛んな、少し嚴峻ではあるが、本質的に親切で同情心に富んで居た。この二人は、この地で、寂しさに元氣を失つてゐた彼を忽ちに元の愉快な彼に回復させた。このシエロツセルが、ブリユウル Bruehl のシヨオンコツプ Schoenkopf といふフランクフルトの女を妻にしてゐる酒商の家に投宿した。その關係を以て彼はその家の食卓に着くことが多かつた。この家にアンナ・カタリナ Anna Katharina (ケエトヘン Kaetchen ともアンネツテ Annette ともネツテ Netze とも呼んで居る) といふ美しい娘が居て、給仕をして居たが、彼の心に、そのやさしさが染み込んだほど、丁寧に酒を注いだ。彼女もまた、彼に心を奪はれ、思ひ合ひが濃厚になつた。嫉妬から起る喧嘩が起るかと思へば、仲直りをする。媾和したかと思ふとまた新に争ふといふやうに、纏れ合つたが、アンネツテが辛抱しきれなくなつた。乃で此の Wo-begone lover は、何とか

して、再び、もとの仲にならうと試みたが、虐め過ぎることの悔悟が遅過ぎて、今後は、友人交際で長く続けようといふことに終つた。一千七百六十八年三月、あきらめてから友人エルンスト・ラルフ・ガング・ベエリシユ Ernst Wolfgang Behrlich に、「彼女は天使で、僕は馬鹿だ」と書いて遣つた。この男は或る若い貴族の師傅として、この地に住んでゐて、冷嘲的滑稽の傾向を有する彼より十一歳年長の瘦せた人であつた。彼はこの人と親密になり戀でも何でも秘密を打明けて聽かせる所謂 *Confidant* にした。そして恐らく、後年、メフイストフェレスの名で表はしたものの中に、この人物から多くを取つたであらうと思はれる。

大學三年目には、やゝ熱心に、オヨオゼル Oeser の、「藝術」の講義を聽いた。この人は、ライプチヒ藝術學校の監督に、ドレスデンから來て居り、賞讃に價する力備を持つてゐた。Pococo が盛んな時これを厭つた所のキンケルマン Winkelmann も數年交際して彼に、グレンシア藝術の妙味を吹き込んだ程であるから、ゲエテに又、

これを説いた。この人から、啓發せられる所が少くなく、彼は又、<sup>メタル・プレッティング</sup>金屬製版術に心を寄せ、繪畫に熱心になつた。ドレスデンの美術館について度々聞かせられるので、視たくなり、そこに或期間居たこともあつた。

彼は、時々病氣に苦しめられた。ライプチヒに來る時車で怪我をし胸を痛め、その後、落馬したことなどが、病の素地をなしたらしい。エツチングを行ふ際悪い瓦斯を吸つたのも無論よくなかつたであらう。一千七百六十八年七月の或夜、<sup>ヒヤイ</sup>喀血したので、肺病の前兆と信じた。醫者や友人の勸告により、旅行に辛うじて耐へられる程度に回復するや否や、故郷に向ひ、九月三日疲れ切つて青い肉の落ちた顔をして、父の待つてゐる學士の稱號も得ずに家に到着した。年末まで肺病と思つてゐたが、肺は健全で、胃がよくないとの確信を得た。その十二月、七日頃、到底覺束無いと思はれる程、激しく病んだ。それからその回復は遅々たるもので、その激しく惱んだ月の卅日に、彼は「不幸もまた、可なりだ。私は私の病氣で、平生學び得な

いものを學んだ」と書簡の中に書いた。翌年三月には、病床から漸く出るに至つた。

彼の病中、彼に親んだのは、母の従姉妹に當る、聖徒の如き敬神家クレツテンベルン Klettenberg といふ老處女であつた。この婦人の一方ならぬ親切が彼を動かさせた。そして彼はこの女に依つて、人生と運命についての深い神學上の問題を考へ初めた。そして一種の汎神論を立て、安心した。彼は後に、キルヘルム・マイステル中の『美しい靈』中に多くこの老處女を描いて居る。老處女は自分と同じく Moravian Brethren の一人であつた醫者のメツ Metz にゲエテを治療させた。彼はこの醫者の手引で、鍊金術を學んだ。六十九年の秋、彼の抒情詩に、ライプチヒの友人ペルンハルト・ブライト・ロツプ Bernhard Breikopf が、<sup>ち</sup>節附をした「ライプチヒ小曲集」を送つて來た。この書物が彼を喜ばせた。その頃彼はまた、フランクフルトを過ぎて英國へと急ぐコルシカの愛國志士バオリイを、ちらと見て、この志士の高尚でロマンテツクな經歷に、胸の火を燃した。

「戀する人の機嫌買ひ」と同じく罪人」と

劇詩「戀する人の機嫌買ひ」Die Laune des Verliebten 一幕物(九場)で、四人の人物が活動して居るだけで、極、簡単なものではあるが、ゲエテが、八ヶ月以上(一七六七—六八)も費したことが明らかであり、推敲し改作したものであり、且又、これで、彼が、如何に、情人、アンナ・カタリナ・シヨオンコツプを愛するの餘り、嫉妬でそれを、苦しめたか、想像せられる。彼自らの機嫌買であつたことを、これが告白してゐると見るべきで、エリドンといふ若者が、アミイネといふ少女を愛して居るが、ちよつとしたことにも、嫉妬を起して、それを苦しめる。この二人の友人に、ラモンといふ男と、エエグレといふ少女とがあり、この二人は愛しあつて居ても互に、或程度までの、自由を與へて、エリドンがアミイネに於けるやうに、窮屈でない。ゲエテが描いた嫉妬的<sup>ウエエラド</sup>我儘氣儘の青年こそ、ゲエテ自らで、アミイネは、

アンナ・カタリナである。ラモンには、ホルンを、採り入れ、エエグレには、コンスタンチエが取入れられてあると想はれる。コンスタンチエは、ゲエテが、ライプチヒで、始終出入した書肆ブライトコツプ家の姉娘で、これは、ホルンと愛しあつて居たのである。

アミイネと、エエグレが花環を作つて居る所へ、花籠をもつて、ラモンが出て来て、薔薇を、アミイネの黒髪に、ふさはしいに相違ないと云つて與へる。それから色々語り合ふ、第二場でエエグレが、アミイネに、貴女が餘り、エリドンに、やさし過ぎるから、あなたを悩ますのだ、あなたが、あの人の性質習慣を變更するやうに、強く出ないからいけないといふ。妾には、あなたのいはれるやうに出来ないと云ふ。そんな弱いことだから、仕様がな、少しは、きつく、そして冷淡に取扱ふと、男の方で、いぢめなくなると勧める。然し、そんなことは、妾には不適當ですわと、アミイネがいふ。あなたのやうな、ぐらぐらで勇氣がなくつちや、しやう

がないと、勵ます、第三場以下を一括して云ふとさうしてゐる所へ、エリドンが来る。そして祭りの踊りに、アミイネが仲間入りすると、他の男と戀意になりはしないかと恐れて、不愉快な顔をする。愛らしいアミイネは、男に向つて、妾と俱に、お出下さい。妾は、たゞ、あなたとだけ組んで踊り、あなたの側を離れない、この腕はあなたに纏ひ付けておくと云ふ。それでも、なほ、執念に、嫉妬の氣分から来る不快を保つて居る。然し、いぢめ過ぎることの悪いことに氣がつくと、許して呉れと、詫びる、睦しく樂しく、少女の愛情を受けることを感謝する、エエグレが、餘り熱し過ぎる人は直ぐ冷淡になるなぞと云ふ所もある。その言葉の通りで、いろいろ少女を惱ます舞踊の好きな少女は、思ふ男から、惱まされて苦しむ。ラモンとエエグレが、一人泣いてゐる少女を慰めて、ラモンが歌ひつゝ踊りつゝ彼女を伴れてゆく。その跡へエリドンが来て、アミイネは、どこへ行つたかと問ふ、エエグレがラモンと、あちらへ行つた、そら、小喇叭の響ひびが聞えるでせう、あそこへ行きます

したと云ふ、男が怒つて、笛を投げ歌を裂いて、信用出来ない不貞腐れ奴と叫ぶ。エエグレは靜に、男に向つて質問を初める、男は彼女が舞踊する際、男性の誰か彼女を色目で見ると、彼女もその男を見返すと、私の胸は裂けるやうだといふ。そんな小つぼけなことに騒ぐつてことがありますか、一體それが何です、そんな場合接吻したつて何でもありませんわと云ひ、猶、言葉を續けつゝ男の手を握り、肩によりかゝり、その手に接吻する。男もエエグレを抱かうとするとき、嬉しさうな様子に態と見せかけて、男の胸へ抱かれるやうにする。男が甘えた口をきゝつ、女の首の上へ乗り掛つて接吻する、接吻させておいて數歩退いて急に言葉の調子を變へて、あなたはアミイネを愛しますかと云ふ、最も愛すと云ふそれでは妾を接吻しますかと云ふやうなことをいふ、アミイネが現れて、あちらに行つてゐたことを謝す、淺ましいのは自分だとエリドンが萎れて居る。エエグレが、妾を澤山接吻しましたよと云ふ、アミイネが驚いてあなたの愛はそんなに不確實なのかと聞く、男が耻ぢ

る。そこでエエグレが、妾は、エリドンの気分は能く知つて居る、妾を接吻した時の気分は、アミイネが舞踊する時、男と、顔を見合せたりしても、それは、あなたが、一寸、出来心で妾を接吻したやうなものだから、今後、やかましく云ひなされるな、そして、嫉妬心が起つたら、あなたが妾にしたことをお考へなさいと云ふ所で終つて居る。

『同じく罪人 Die Mitschuldigen』は、『機嫌買ひ』よりやゝ長い三幕物である。黒熊と云ふ宿屋の出来事で、主人に一人の娘がある、その名をゾファイイと呼ぶ、アルチエストと云ふ客が、先年来て宿り込み、ゾファイイと戀意になつて居たが、その客は久しく來ない。主人は、放蕩者のジヨルレルを聳にした。そして、その聳が、家業を勵まないばかりで無く、始終、遊んで居て、酒を飲み、朝寝をする、賭博もするので、大いに不平である。そのジヨルレルに、金を貸して居る、チリネットと云ふ悪友が返金の督促に來る。それと勘付いて、ゾファイイが、彼の男は、妾達を、す

つきり零落させて了ふと慨く。

久しぶりに、來て宿泊して居るアルチエストが、ゾファイイと二人ばかり對座した時に、私は、あの、たのしい過去を忘れないのに、お前は、今では、忘れてしまつたかと、口説く。妾はあなたに、さう云はれると耐らない。あなたが、さう云つて下さる情が、妾を苦しめる。妾の胸は壓しつけられて居ると云ふ。語つて居る内に、アルチエストが、可愛い天使だと云つて抱き付く、放して下さい、誰か來ますよと女が云ふ。アルチエストは、私には、お前が私を愛してゐることがよく了解せられる。就いては、今夜、是非、私の部屋へ忍んで來て呉れ、それが、いけないならば私がお前の部屋へ出かけようと云つて誘ふ。その日、アルチエストの所へ、手紙が來る、亭主は、大封であつたり、封筒などが、非常に立派なものであるので、その手紙の内容が知り度くつて耐らない。それを見たら、國家的大事件を多くの他人より前に知ることが出來ると好奇心を燃やして、何とかして、それを知る方法はないか



と思つて、アルチエストに、尋ねかけるが、一向、明して呉れない。娘に向つてお前、尋ねて見よと云ふ。その手紙は、重要なことですかと問ふ。それには、明答を與へないで、亭主がなくなるかと、また盛んに、口説く。ゾファイイは、この男を、きらつて居るのではないが、妾には、そんなことはもう出来ませんわ、妾は、最早、妻ですからと拒む。それにしても、一言、お前に、是非、云つて置かねばならない事があるから、今晚、来て呉れ、戸の鍵を渡して置かうかと云ふ。ゾファイイは、それには及びません、妾の鍵で、どの戸も開けられますと、ほゞ承諾する。

アルチエストが、金を持つて居るのに、目を附けた、放蕩無頼の、ジョルレルは、盗みとらうと、その夜、假面を被り、靴を穿たずに、籠燈を提げて、現はれた。そして、アルチエストの部屋に入り、舞踏場に出てゐて居ないのを幸と、金庫から、金を摘み取つて、衣囊に入れる。人が来るらしいので、側の小室へ逃げ込んで、呼吸を殺してゐると、それとは知らずに、亭主が、蠟燭を手にして、アルチエストの室

へ入つて来る。それを見て、親父の悪魔奴とジョルレルが、ひそかに云ふ。主人は、金を取りに来たので無く、先刻他所から来た、手紙が、見たくつて、それに大きな秘密が藏されてあるやうな心持がして居耐らなくなつて、探しに来たのであつた。そこらを探しても見つからない。困つたなと思つて居ると、客間の方から、人が近づくと足音がする。足音から推察すると、それは男でないらしく感じられたが、何にせよ、こゝに居るのを見付られることは、よくないと、蠟燭の火を吹き消して、小さい戸を、あわてゝ推し開いて逃げてしまふ。

隠れて居るジョルレルは、また曲者が来たなと見ると、それは、自分の女房であるから驚く。そんな所に、夫が忍んで居るとは思はないから、彼女は獨りごとを云ふ。アルチエストは、本當に妾を愛して呉れる。妾もまた、随分、あの人を愛した。然し、運命が、二人の中を隔てゝ、不幸にも、妾は、あんな、獸を、夫としたと云ふ。何だと、俺を獸と云ふかと夫が、聞いて居る。ゾファイイは、そこに、父の忘れ

て置いた、蠟燭立てに目を注いで、どうしたことかと、疑の念を起して居る。そこへ、アルチエストが、歸つて来る足音がする。妾は、彼を愛し、彼を恐れると獨りごとを云ふと、隠れて居る夫が、俺も、彼奴を非常に恐れると云ふ。

二人は、愛を語る、そして、ゾファイイは、夫に對する不平を並べ、それに対して、ジョルレルが獨語するのが面白い。ゾファイイは、夫は、何一つとして善いものを持たない。巧妙なと云へることは山師らしいことである、あの夫の爲に、妾の家は亡びてしまふのですわと云ふ。そして、今一度、別れの接吻をして下さい、妾は出てゆきますと云ふ。お前は、行つてしまふ氣か、お前は、私を愛し乍らゆくのかと、アルチエストが熱心に引留めようとするが、やがて、送り出す。ジョルレルも逃げる。あとで、アルチエストは金庫に目を留めて驚く。

翌早朝、娘が、父の所へ来る。何故、お早うを云はないかと云ふと、妾、今朝は、悲しい氣分ですと云ふ。そして、アルチエストが、金を取られたことを云ひ、娘は、

父が取つたのだと思ひ込み、父は娘が盗んだのだと思ひ込む。

亭主は、アルチエストの前に行き、幾何、盗まれたかと尋ねる、一百弗だと云ふ。父は、それを盗んだものは、家の内のものだと云ふ。誰か云へと云ふ。云はれぬと云ふ。下女か、給仕か、料理人かと尋ねるが、さうでないと言ふ。アルチエストが思ひ出したやうに昨日の手紙の返事を、一時も早く認めなければならぬと云ふ。亭主は、またも、熱心に、あれは、亞米利加からですかとか、フリードリッヒがまた病みましたかなどと問ひかける。その熱心を見込んで、お前さんが、盗人の名を云へば、この手紙を示しても可いといふ。釣られて、云ふから手紙を見せよと云ふ、手紙を見せてもらふ時に、盗人は、私の娘だと云ふ。それは眞實かと反問す、眞實だと云ふ。

アルチエストは、ゾファイイに逢つて、父の言葉を種に、娘を靡かせようとする。娘は、父が、そんなことを云つたと知り、眞の盗人は妾で無くつて、父ですと云ふ。

父と娘と別な所で、争つて居る間に、アルチエストは、ジョルレルと言葉を交す。ジョルレルは、アルチエストと、ゾファイイとの關係について妙な口をにらす、それを聞かされて、アルチエストが、質問する、言葉に矛盾が出て来る、言葉が詰つて逃げ出さうとする。アルチエストが、憤り、劍を抜いて、威嚇して、今、見たとか聞いたとか云ふのと何を見たのだ聞いたのだと、激烈に責める。昨夜見た聞いたと云ふ、そして遂に、盗人は自分だと白状する。さて、汝は、かるはづみな奴だと云ふと、仰せの通りかるはづみです、然し私は金を盗つたのであり、あんたは手前の女房を盗んだのだと云ふ。

盗んだのがジョルレルだと判然したが、罪の無いものも皆、同じく多少の罪人であるので、ジョルレルの罪をも赦すと云ふ所で終つて居る。

幕の順序を云ふと第一幕第一場は黒熊屋でジョルレルが酒を飲みゾファイイが裁縫して居る所へ主人が来て、聲に對して、耳の痛いことをいふ、娘もまた夫に不平を

述べる第二場は夫婦談つて居る所へ、チリネットが来たと、給仕が知らせて来る。第三場はゾファイイの獨白、第四場は、アルチエストとゾファイイの會話第五は、アルチエスト宛の手紙が来たのを主人が非常に心に懸ける、アルチエストが、ゾファイイに、隠れて會ひに来いなどといふ第六場アルチエストが帽子をもつて階上へ出て行く、手紙を氣にしてゐる主人をはじめ、娘も聲も「お眠み」の言葉を交す。第七場は、ジョルレルが、アルチエストの金を盗まうとの獨白、第二幕、第一場アルチエストの部屋へ入聲が忍んで来て足音を聞いて隠れる、第二場主人が忍んで来る、人の近寄る氣配に驚いて去る。第三場ゾファイイが忍んで来る。第四場アルチエストとゾファイイの會話、ゾファイイが盗み聽きをする。第五場はアルチエストが金箱を開いて見て驚く。第三幕第一場主人の思案、第二場父の所へ娘が来てアルチエストが金を盗まれたことを告げる。兩人が互に疑ひ合ふ。次の場は主人がアルチエストの所に來て、その正金を見出しませうなどと云ふ手紙が見たさに娘が賊だと云つた主人は第四場

で狂人のやうに煩悶する。第五場、ジョルレルが養父の煩悶の所へ入つて来る。その次は恐れを抱いて居るジョルレルがアルチエスを見て逃げる。第七場アルチエストの獨白、次の場はゾファイイを手に入れようとするアルチエストとゾファイイの會話。次はアルチエストとジョルレルとの會話、第十場主人と娘と居る所へアリチエストが現れると互に、盜賊だと指す、それを笑つて眞に盜賊はこれだと、ジョルレルを指す。ジョルレルが眞の盜賊であつても、他の人々にも同じく多少の罪があると云ふので彼を許す。こゝで結局となつて居る。

### シユトラスブルヒ遊學、辯護士

ゲエテの病氣が、回復した頃、父は、シユトラスブルヒ *Strasbourg* 大學に法律を學びに行けと命じた。そして、そこで規定の學業を習得したならば、パリ *Paris* に遊ばすと云つた。ゲエテは幼年時代から、佛蘭西が好きなのであつた。

一千七百七十年三月、一千六百八十一年以來佛蘭西領になつてゐた *シユトラスブルヒ* 市に向けて出立した。所が行つて見ると、空想は壞れた、軍隊と役人とは佛人であつても、その他は、獨逸らしくはあつても、佛蘭西らしくなかつた。到着するや彼は先づ、第一に、高い所から、眺望を楽しまうと、聳えた寺に足を向け、そこから眼下に展開して居るエルザス *Elsass* の風景を賞し又、大なる、チャーチに眼を注いで深い印象を得た。その印象たるや、壯大にして刺戟的であつた。何故かと云ふに、これが彼が見た最初のゴシック式の大伽藍 *カウイドラル* であり、當時ゴシックは、粗野と同

意義に思はれて居たのであるから彼は、不格構な、突立つた怪物を豫期したのに、  
案外にもそこに、調和と技術の玄妙な感銘的なものを見出したのであるから此の魅  
惑的工作に對し、測量して見たり比較してみたりして容易に去り得なかつた。彼は  
この大伽藍を以て、日耳曼藝術の軌範として後に、論文をも、草した程で、これか  
ら佛蘭西の美術工藝に對し漸次、自國のもの、優越を認めるに至つた。佛蘭西女  
王、マリイ・アントアネット Marie Antoinette が巴里への途次、この地を過ぎた、そ  
の際彼が佛蘭西語の詩を作つた。それを一佛人が非難したので、いよいよ彼は今後、  
佛蘭西語で作詩もしないと定めた。されば彼の文章は、この頃から、殆んど皆、獨  
逸語で書かれた。

彼ははじめツム、ガイスト Zum Geist 旅館に、入つたのであつたが、間もなく、  
魚市場の南側に小さいけれども位置の好い旅宿を求め得て、そこに居り、そこから、  
クノオブプロホスガツセ Knoblochsgasse の處女ラウト Lauth 家に午食を食べに行つ

た。こゝの食卓長は、ザルツマン Salzmann と云ふ四十八歳（ゲエテの自傳には六  
十歳として居る）の獨身者であつた。この人は教養あり趣味にも富んで居る、ゲエ  
テと、哲學の意見につき話し合ひ、早く學位を得るには何々を調査することが便宜  
だといふやうなことを丁寧に示してくれた。この食卓中間に、自己の生活方法境遇  
一切は天命であると信じてゐるユング・スチルリング Jung Stilling といふ三十歳に  
して醫術修業に來てゐる男も後から加はつた。この男は口癖のやうに、ゲエテを初  
めて見た折のことを判然と記憶してゐて繰返した。ユングの友人、トロオオスト  
H. Oost 等もその食卓に來て居た。これらの人達は、はじめゲエテを見て、先づ活潑で  
あること、若いこと、大きな眼が輝いて居ること、立派な額であること、優雅な姿  
であることに驚嘆した。「きつと、豪い人だよ、見給へあの様子」をと、一友人が、  
スチルリングに云つたので彼も同意したと云ふ事だ。この食卓仲間後に有名にな  
つたワグネル Wagner も加はつて居たと云ふ。

彼は、病中に得た神秘的思想によつて、深く冥想したいと思ふこともあつたが、ザルツマンに、つれられて、この地の交際社會の人となると、随分、愉快なので、それを娛んだ。この地では、骨牌遊びと踊りとが大變流行してゐて、交際場裏に缺くべからざるものとなつて居たので、彼は骨牌遊びを學び、また踊りの稽古に、或佛人の師匠の許に通つた。この師匠に、リュシンデ Lucinda とエミリー Emilia と云ふ二十歳を超えない姉妹の花のやうな娘が居た。そして、二人とも、彼に戀慕してしまつた。所が彼は妹を好んだ、妹には許婚者がある。不幸なる姉が、妹に對して、恨を云ふ。そして、ゲエテの顔に口を寄せて接吻して、今後、はじめて此人の唇に觸れるものには幸福を與へないぞと呪つたりする事件もあつた。

一千七百七十年の彼の誕生日の後に、候補生試験に及第したので、卒業論文を起草して學位を貰ふのは苦もないことと思ひ、元來好きな化學とか醫學とかに心を寄せ解剖もやつてみれば産科の臨床講義にも出席した。のみならず、ゴシック式建築

について調査を進め、エルザスの古器物に對しても興味を持ち、多方面に目を配つた。

同じ年九月に、有名な、ヘルデル Harder (千七百四十四年生) が、シユトラスブルヒに來た。彼はその月の或日、或人を訪ねにツム、ガイスト旅館に行き、その玄關の階段の下で若い牧師らしい人に偶然出合つた。黒い絹のマントルを着け、飾つた髪を圓く捲髪まきげに束ねた風采が、上品に心持よく感じられた。この人が、ヘルデルだなど直覺したので、鄭重な言を以て、呼びかけると、ヘルデルには、彼の名を問ふた、名を告げても、彼がそれを前から知つて居る筈は無い。然し、彼の態度が氣に入つたか、親切に階段の上に導いて、種々談話を交した。それから度々、この人を訪問した。彼は當時、目の病氣で、この地で手術したのであつた。年齢は、ゲエテより五歳しか上でなかつたが、レツシングやキンケルマンや、ハアマンやクロブストックなどと並稱せられ、古今東西の書に精通してゐる學者で精神界革新の功勞

者と目せられ、重きをなしてゐたのである。この人には、大變、氣むづかしい所があつたので、いやになることもあつたが、彼の美しい性情、廣大な智識、深奥なる見解に引付けられ尊敬を拂つた。ゲエテは母親から受けた寛容を以てこの傲慢な皮肉屋を捨てなかつた。そして神秘的宗教的化學的研究の方に趨つてゐた間に一般に流れようとしてゐる新しい文學界の空氣を見せられた。言語の起原に關する論文をも見せてもらつたが、心中に、こんなものは大したことでないと思つた。ヘルデルは、ゲエテの藝術熱を、子供らしいとして嘲笑を下したことも度々であつた。

ヘルデルは、ダルムスタット Darmstadt に戀女があり、病氣を全く治してその方へ行きたくあつたらしいが、どうも、巧く良好な結果が得られないので、性急に憤然として彼は七ヶ月あつて此の地を去つた。去る際に、ゲエテは他人より金を借りて、彼に貸した。ユングも、ヘルデルを崇拜して、ヘルデルの賞讃する、ハアマン、セエクスピア、ホメロス、スキフトなどにつき、ゲエテ等と例の食卓で、語り合つた。

ヘルデルの讀めよと云つた、ゴオルドスミス Goldsmith の、キカア、オフ、エエタファイルド Vicar of Wakefield は、ゲエテも熱心に讀んだ。

食卓仲間に、エルザス人のワイラント Weyland と云ふ神學生があつて、ゲエテと仲か睦じく、度々二人で旅をした。この人が、六里ばかりを距てたドルウゼンハイム Drusenheim に近いゼエゼンハイム Sesenheim に、牧師が居り細君も面白い人だが、實に可愛らしい三人の娘がある、そこへ一度君を伴れて行つて遣りたいと度々云つた。

或日、二人は馬で、その地に向ひ、牧師ブリオン Brion 家に入り、その家庭に、ゴオルドスミスの Vicar of Wakefield 中に在る人物に肖た、人々を見出した。マリイ・サロメア Marie Salomea と云ふ二十一歳の姉も美しかつたが、フリーデリイケ Frederika と云ふ十九歳のが、ゲエテの心を捕へてしまつた。ゾファイイ Sophie と云ふその妹はまた十四歳であつた。彼は、自傳中に、フリーデリイの風貌を、こんな

に書いてゐる。

奇麗な小さい足が、踝まで見えるやうな短い縁を飾つたまるい白色のスカートや、しつくり合つた白い襦袢や、黒い薄絹の前掛エーパインや、田舎少女と都會少女との境目に在るやうな装でをしてゐた。すらりつと軽く、運ぶべき何も持たないやうに歩いた。頸は雅致のある小さい頭の大きな美しい編んだ髪に對して、さやしや過ぎるやうに見られた。青色の晴々しい眼で、明かにあたりを見廻した。品のよい圓味をもつた小鼻は、世の中の屈托を少しも知らないかのやうに自由に呼吸してゐた。麥藁帽は、腕に掛つてゐた。私は一見直ぐに彼女の優しさ愛らしさを見て知つた。そして喜んだ。

と書いて居る。この少女が戶外で、可愛らしい聲で、唄を唱つて聽かせた折なぞ、ゲエテは可愛くつて耐らなかつた。ゲエテは、翌朝になつて、貧しい神學生に扮して來たことを悔ひ、そこを飛び出して、何とか立派な服装をして來なければならな

いと、考へ〜馬に乗りて引歸して來た。そしてドウルゼンハイムに於て知つて居る地主の息子の友人から、その人の着物を借りて、再び牧師家へ行つた。所が着物を貸した人も度々牧師家へ出入する青年なので、下女や、主人や細君や姉妹、又弟なぞが、この假裝したゲエテを、地主の子と思ひ込んで居て、面白い戯れが、演じられる。牧師も、その妻も、ゲエテを愛し、わけて、フリーデリイケが、熱烈に愛するので、彼は彼女を其後度々訪問し二人はたのしい時を過すこと多かつた。

この前に彼は卒業論文を提出しなければならなくなつたが、法律よりは、醫學ななどを興味をもつて調べてゐた事として、法律論文を出す場合、餘り心強く感じないので「僧俗を繋ぐ宗教上の禮拜式を官憲にて定めよ」と云ふ廣い大まかな題で書いた。それを検査した學長が、あの論文は、發表することは出来ない官憲の忌む所となる憂がある故、口頭試験を受けたらよからうと云はれ、それに従ひ、「ドクトル」となつた。彼の如き英才は、他人の注意する所とならないでは已まない。大學教授の或



者は彼を、大學の教授にしようとしたが、彼は、それを辭して、フリードリイケを、棄てるのは、耐へ難い苦惱であつたが、戀愛の捕虜にされてゐては、將來の發展に支障を來すとして、思ひ切れないのを強て思ひ切つて八月故郷へ歸つた。残されたフリードリイケの悲嘆と、フランクフルトで、戀人を思つて惱む彼の苦しみとは、いづれも淺くなかつた。——七十一年八月、フランクフルトに歸つて間もなく辯護士を開業した。これは父への申譯と云つたやうなもので、乘氣のしない事業であつた。それにせよ、二十二歳の辯護士は、健康ではあり、自由に創作に筆を執り得られるので幸福であつた。以前、病氣で、フランクフルトに病んだ際から、胸底に、いつか筆を取らうと貯へて置き、ヘルデルにも誰にも口外しなかつた、「ファウスト」Faust と、「ゲオッツ・フォン・ベルリッツェンゲン」Goetz von Berlichingen 及び「ユリウス・ケエザル」Julius Caesar に筆を進めようとしたが、ファウストは大作になる見込なので先づ、十一月半から、舞臺に上す事の適否など考へずにゲオッツツを書初め

て僅の間に書き終り、ヘルデルの所へ贈つて見せたら彼は後エ、ツラルの彼の許へ「シエクスピアが十分に君を、だいなしにしたよ」と表面だけは冷淡に云つて來た。ゲオッツの終るや否やケエザルを書いた。この頃、父は、幾分、子の不規則な生活を、やかましく云はないやうになり、子の法理學の上に希望を懸けて喜び、母親は、素から彼を愛してゐるのであり、妹も又、兄思ひで、至つて二人の間は睦じく、ユルネリアがシエロツセルの妻になると聞いた時、少し嫉妬を感じた程であつたから、家庭も圓滑で面白かつた。「ゲオッツ」の後で「獨逸建築術」Von Deutscher Baukunst を著した。

併し乍ら、この土地が、活動的であれば可いが、沈滞してゐて寂しいと、別れたフリードリイケに消息したほどであるので、少しでも沈滞を破りたいと、この年の十月十四日に、セエクスピア祭を行つた。その頃、シエクスピアの戯曲を賞揚して『美しい奇妙な箱』それに於て世界歴史が時の見難い絲で引かれ吾々の眼前に

動き行く」と書いて居る。彼は、セエクスピアの偉大を慕ひ、われまた彼の如くにならうと思つたでもあらう。「ゲオッツ」と云ふのは、十六世紀の代表的騎士で、彼の生涯の大部分を、掠奪に費したのだ。ゲエテはこの劇に於て形式革命を志した。出版したのは——七十三年の夏で、大變な評判を得た。ゲオッツを書き終るや、ソクラテエスを主人公にしたものに筆を起す、プラトオとクセノフホンに就いて調査し、その方面に得る所が多く、アナクレオンにもテオクリトスにも手を出した。ピンダールやオッシアンの詩を愛誦し又これを譯し、マホメットに就いて戯曲を作りはじめるなど、前方へくと、極力努めた。

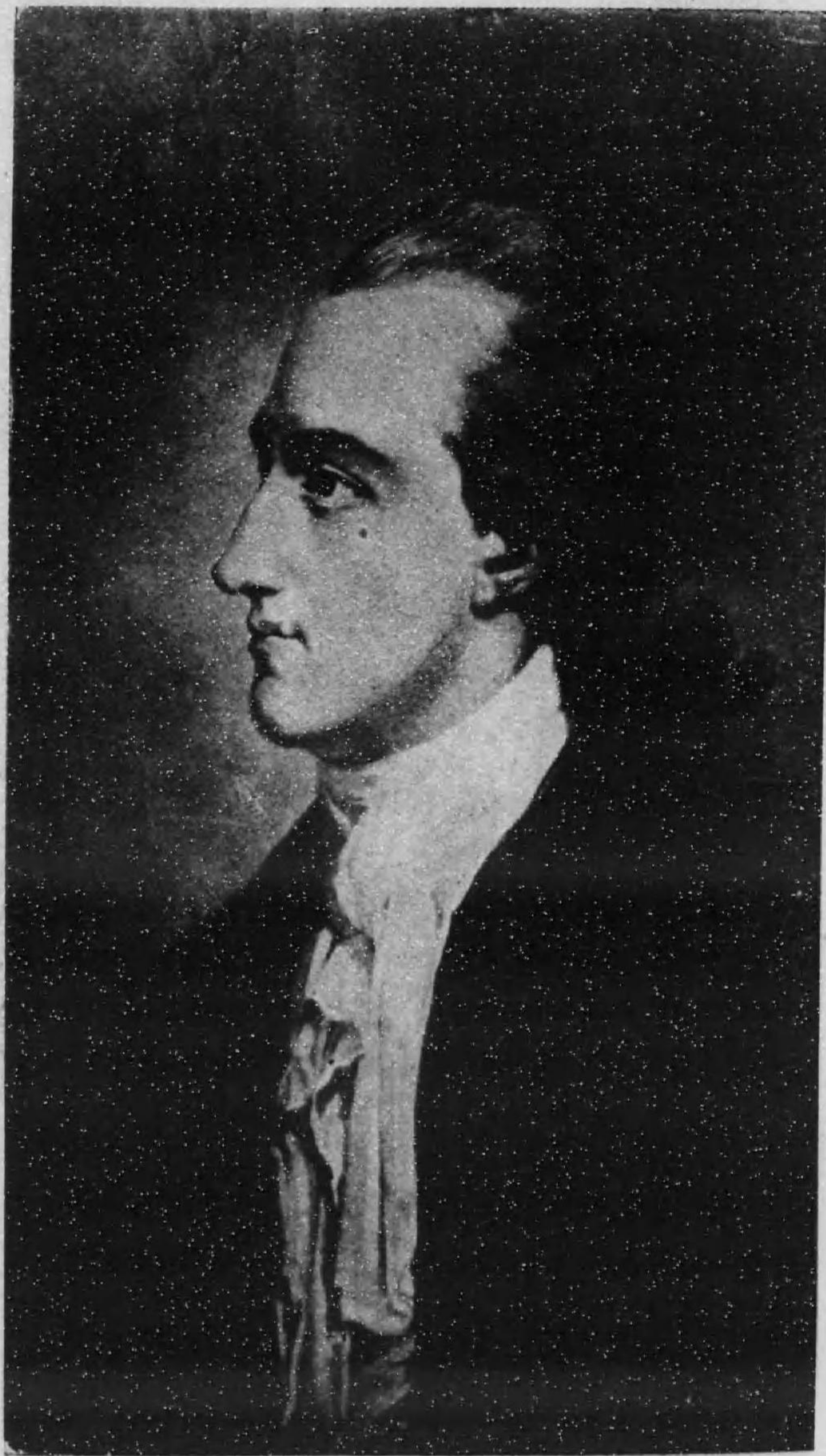
彼は、好んで田舎へ散歩に出で又フランクフルトとダルムスタット間を歩いた。身體の強さに由つて暴風雨に對抗して、樂みを取り「散歩人の暴風の歌」Wanders Sturmlied なども作つた。この詩には、所謂狂風の如く破壊し突進するといふ新思潮「シユツルム・ウント・ドラングツアイト」の影響が見える。——七十二年の三月の

初めに、彼はシユロツセルと共に、ダルムスタットに行き、メルクン Morck を訪ね、その親切に動かされ知己となつた。この人は、當時三十歳ばかりで非常に多く讀書して居り、又、鋭利な記者であつた。頗る友人も多かつたが中には彼の辛辣、刺す如き皮肉を恐れるものもあつた。穩雅柔和は決して求められない。ゲエテ自傳中の此人に關するスケッチから、推量し得る如く、シニカルで、メフェイストウフィリアンであつた。頭腦の明晰と常識とはゲエテの感情の荒れ狂つたり壓迫せられた時には、支持的心友と頼むに足つた。

ゲエテは、メルク家を訪ふと數日間滞留する。メルクの所に入出入する美人達が、彼を持てはやす、就中、プシヘ Psyche と云ふ詩の名を持つ、ヘルデルが婚約の女、カロライネ Karoline と、ソラ Lila の名を有つ、チイグレル Ziegler とウラニイ Uranie の名を有つ、ルシイヨン Roussillon と云ふ年少地上の Eroa は、彼を見ることか何より好きで、迎へてはキツスをし彼を取圍んで、踊つたり、遠足したりして別

れる時には悲しい抱擁をすると云つた有様で、カロリイネの如きはビエツケブルヒ  
Bückeburg に在る愛人の許へ、——七十二年三月に「妾達の天國の友人は再び去り  
ました。妾は、別れのキッスをして心からの涙を流しました。」と、書いた。これに由  
つても彼等少女達の心を如何にゲエテが恍惚たらしめたか推測せられる。女達は、  
彼を、「逍遙する人」だとか、「秘密を打明けて可い人」などと呼んだ。

メルクとの交際から、彼も、メルクの関係深い「フランクフルト、ゲレエテルテ、  
アンツアイゲン」Frankfort Gelehrte Anzeigen 誌上に評論のペンを揮ふことになつ  
た。この雑誌が、——七十二年の一年間、ヘルデルの急進主義と歩調を一にした所  
の文學自由行動團の機關であり、盛んに、因襲的沈滞の空氣を攪拌したが年末に彼  
等の手を離れるやうになつた。匿名を以てしたゲエテの寄書も随分、尊大猛烈なも  
のであつた。宗教と聖書との關係についても論じて居る。



## エッツラル時代

一千七百七十二年五月再び家を去りラン河の左岸に位するエッツラル Wetzlar にゆき、その地の大審院に見習をしようとした。この大審院は、甚しく腐敗してゐて脊信不徳、見習つても、利益は無いので、彼は、手に法律書よりもピンダル Pindar やホメロス Homeros を携へて田舎を歩き廻り、自然を楽しんだ。手帳に山川草木をスケッチすることも多かつた。

六月九日の夕、エッツラルを距ること約二里のオルベルツハウゼン Volpertshauzen で催される舞踏會に行つた。その往く途中、他の女達と一つ馬車に乗つて急がせた、所がその女達が、友人を誘ふので、道から或家へ馬首を轉じた。ゲエテは、暫く待つて呉れとその家の下女が云つたので、蒸し暑い夕であるから、馬車から下りてその家の階段までゆくと、白い上衣ガウンを着た一少女が、彼女を圍んでゐる六人の

弟妹に、物やさしく麵麩を配つて居るのを見て、忽ちその美に打たれて、恍惚となつた。

この少女は、シャルロット・ブッフ Charlotte Buff と云ひ、父はエツツラルの公吏であつた。十六人も子があつたが、十一人残つてゐた。その子の中二番目に當るのがこの美しい快活なシャルロットで其年十九歳（十五歳との説もあり）であつた。長女のカロリイネ Karoline は、少し不活潑で陰鬱な女性であるから、母の歿後このロットが、母に代つて、子供の世話に當つてゐたのだ。

此の娘は全體美しくない所はないが特に豊かな髪、曇りのない眼が目立ち、物解りが敏く、いつも生々として、愛想よく、困難なことに面<sup>めん</sup>しても、微笑しながら遂行するといふ好ましい素質を有つて居た。

この美人と、その夜、ゲエテは腕を組んで舞踏して、互に愛しあつた。それ以來、その黒珠の勝つた眼、鮮な紅い唇、人をそらさない、快い言葉が、彼の魂を奪つた

ので、彼は毎日訪問して、晝は弟妹達と彼女を圍んで、草原に遊び夜は部屋に語つたロットにしても今までこんな立派な青年を見たことがないので、彼の顔を見なければ淋しく感じるやうになり二人の間はいよゝゝ親密になる。然しこの女には許婚がある。その男は、ゲエテと、エツツラルの某所で、午食の卓を共にする仲間の一員であつても多忙で滅多に來なかつたが、一緒に散歩したこともあるヨハン・クリスチャン・ケストネル Johann Christian Kestner と云ふハンノオエル Hannover 生れの彼より八歳の、年長者であつた。ブルンスキツク Brunswick 公使の書記たるこの人は堅實有爲にして節を變せざる上に、職務に忠實、文學に鋭く精しい見識を有してゐた。ロットを知つてから、又、この人の男らしい寛大を愛して一層親しくした。彼はゲエテの胸に燃え立つ戀情を忽ち見たが、決して言葉にも舉動にも嫉妬らしい何物をも表はさないで彼等の交際を續けさせた。

ゲエテと、彼女との、愛着が盛んになればなるほど、ゲエテは不安を感じないで

は己まない。許婚のある人を戀する苦しみに耐へられなくなつて、兎にも角にも、此の地を早く去り、彼女を見るに不便な所に在るに如かずと、意を決して明日出立しようとする。——七十二年九月十日に、ケストネルと庭園で、食事をなし、その夜、ロツテを訪問した。ケストネルの日記中に、こんな文句がある。

「十日、この日、ドクトル、ゲエテは、庭園で私と食事した。夜に入つてから獨逸館に來た。彼と、ロツテと私と來世に就いて、語り合つた。死んで行くものが歸るであらうかといふやうな事について、これは専ら、ロツテが彼に話し掛けたのであつた。そして三人は、誰か、最初に死んだものが、若し生きてゐる人に消息が出来るならば、他界の状況を報知しようと約束した。ゲエテは、何となく氣力無く見受けられた。彼は明日、この地を去るのだと思つたからであらう。」

夜が更けたので、「ロツテさん、御機嫌よう、ケストネル君、さようなら、またお目にかゝりませう」と云ふと、彼女は彼女の夫、同様、ゲエテの明朝去ることを知

らないので、「また明日ね」と應じた。その言葉を、これが、聞き納めになりはしないかと、心の底に思ひつゝ、振りかへり、親しみ深い家を出た。

そして、翌日、そこを、こつそり立つた。ロツテの手に極めて簡単な、わかれの辭だけ書いたものを送つておいて。ゲエテは、フランクフルトに歸つてから有名な『若きエルテルの悲み』を書いた。これには、彼がロツテに對した感情が多量に取り入れられてある。

はじめ、ダルムスタッドで、メクルの所へよく來た、ゾファイイ・ラ・ロツシエ *Marie Larroche* 夫人に逢つたことがあつた。この夫人は『ステルンハイム』 *Sternheim* と云ふ物語を書いて評判を得たこともある。エエレンブライテンシュタイン *Ehrenbreitenstein* の麓の、美しい村端の、彼の家へと、既に往くことが通じられてあるので、ラインの方へ、ラン河邊を徒歩でそろ／＼と下つた。前、數週間、神經を痛めて居る衰弱を、又、沈んで居る氣分を目に入る風景の美しさが幾分晴させたに

違ひない。

この家に在る間に、メルクが細君や小さい子を伴れて来た。ゲエテは、大變これ  
を喜び、エツツラルに於ける交友との關係や、感銘したことや、ラインの風景など  
に就いて、心を打ちあけて語つた。ゲエテは、ダルムスタットに於て、この夫人を  
餘り好まなかつたが、その家庭に入つて見ると、よくその眞價が解り、愛情も加は  
り、信用も増した。そして、夫人の寵愛してゐる二人の娘の中、姉のマクシミリア  
ン Maximiliane (マツクセ Maxe) と親密になり、互に色々の話をしあつた。マツク  
セは、當時十六歳で、黒い美しい眼をもつた、包み隠しをしない、やさしい少女で  
あつたので、エツツラルを、戀の危険から脱れ出したに係らず、また、こゝで、そ  
の美に心を傾けるに至つた。二人は、手を取りあつて、そこらの風光の佳麗な間を  
逍遙し、岡にも上つたであらう、渚にも立つたであらう。

### 『ゲオツツ・フォン・ベルリツヒンゲン』

一千七百七十二年九月の終の頃、ゲエテは、ラ・ロッシユ夫人の許を去つて、フラ  
ンクフルトに歸り、また辯護士として日を過した。併し彼は心中に、將來、精神を  
打込んで行るべきは文學であると決して居つた。

はじめ、『ゲオツツ・フォン・ベルリツヒンゲン』 Goetz von Berlichingen の寫本を、  
ヘルデルに送つたら、後エツツラルに在る彼の所へ、『セエクスピヤの影響が多過ぎ  
て困る』といふやうな評をして來た。若い文學者に對し、機嫌をとるやうな事を云  
つて來ない所に彼の彼らしい所がある。これに依つて、ゲエテは、改作しようと思  
つてゐた。又、メルクが、心から賞めたので完全なものにしよう——七十三年の  
初に、家の頂上の一室に入り込んでそれに毎日、従事して、冬の近づく頃に完成し  
た。題名も、第一稿の時には、(Geschichte Gottfriedens von Berlichingen) としてゐた

のを、Goetz von Berlichingen mit der eisernen Hand Ein Schauspiel と改め、一千七百七十三年發行した。

その梗概を云へば諸侯が、民を虐げ、自己の私腹を肥やすことのみを心に傾け、天子に向つては、都合の宜いことを述べて、これを利用して、民と天子との間にあつて、不都合なことを絶えず行ふ。この戯曲の主人公、ゲオッツは、人民の味方となつて、これらと戦ふ勇敢な騎士である。されば、民衆からは神の如くに敬まれ、その勇武は廣く響き亘つて居る。而して敵の爲めに、右手を射落されたが、武器師に命じ、鐵を以て、これを補はしめてゐる。この男と、少年時代から長い間起居を共にしてゐた美貌のワイスリングンと云ふ騎士がある。これは、ゲオッツの敵側に味方し、ゲオッツに仇しようとして彼の城近くへ來る。それをゲオッツが生捕つて來て、昔の友人扱ひにして、昔を語り、その不心得を諭す。ゲオッツにマリアといふ天使のやうな妹がある、これと捕はれのワイリングンと愛し合ふ、ゲオッツが二人を夫婦

にさせることゝともに、悔悟しかゝつたワイスリングンに、敵側の爲めに活動することの不可を知らしめる。ワイスリングンをゲオッツの城へ送つたバムベルヒの僧正の宮殿に、アアデルハイドと云ふ後家の美人が出入する。これにワイスリングンの臣、フランツが戀慕して居る。アアデルハイドは、自分の美貌と才略を以てすれば、ワイスリングンでも誰でも操縦せられるだらうといふ自信を持つて居る。フランツが迎へに來る。ワイスリングンは僧正の許に往き、今後の自己の立場を明にしようとして歸つた。所がワイスリングンをこの妖婦が、色を以て捕へてしまふ。ワイスリングンは再び、ゲオッツに反抗しようとして決心し、天子に接近し、惡口を以て、ゲオッツを討たせようと計畫する。天子は、ゲオッツをさまで憎まで、却つて味方になると内心想つて居るので、嚴しくこれを攻めようとせぬ。

併し、腹黒き、ワイスリングンは、色々策を立て、兵を向ける。ゲオッツと、志を同じうする。ジツキングンが異約せられたゲオッツの妹マリアを妻に呉れよと



申込む。既に婚約したがワイスリングゲンが捨てたと告げると、それならなほ貰ひたいと云ふ。さうしてゐる所へ敵が間近に押寄せて来る。ジツキングゲンが、兄弟の誼にこゝで奮戦しようとする。ゲオツツが、こゝで二人同志と見られることは、お互の損失で他日、君の助を要する場合があるから、眞實、義兄を思ふなら妹を伴れて逃げてくれといひて、二人をそこから出してしまふ。曩日、ゲオツツの腕を落した勇士レルゼが来て、あなたの人物に敬服した、これから、あなたの爲めに味方して、ワイスリングゲン方の敵と戦はうと約束をする。以来ゲオルグといふ若い少年とレルゼとが、股肱になつて寡を以て衆に當り乍ら、敵を惱ます。敵はこの正直な騎士的氣風でなく陋劣な手段でゲオツツを苦しめる。ジツキングゲンは、官軍の無法な誓を破つたことに對して、脅威してゲオツツを救ふ。ジツキングゲンの名聲の高くなるのを聞きワイスリングゲンが、じれる。そして妻が太子のカルルと悪意にするのを嫉み、宮中の出入を禁じようとする。彼女は肯じない。強いて、自分の居城に入れようと

する。この前から既に、主人の妻と密通して居るフランツが、この妖婦の計略を受けて、主人の在る所に往き食料の中へ毒を入れる。毒を飲んだと知らないで、衰弱を嘆いてゐる所へ、マリアが来て、兄を死刑から救ふ道を講じて呉れといふ。ワイスリングゲンは良心の呵責に煩悶する。あなたの心の底に、アアデルベルトさんといふ悪魔が喰ひ込んでゐるのだといふ。やさしいマリアに動かされて、死刑宣告書を裂いて終ふ。フランツが又、毒を飲ませたことを自白し、これもアアデルベルトの指圖だと云ひ、マイン河へ飛び込んで死んで終ふ。續いてワイスリングゲンも死んで終ふ。牢屋の中で、老體に創を受けて惱んでゐたゲオツツも貞淑堅固な妻のエリザベツトと妹とレルゼとに圍まれて死んで終ふ。

マリアが「ほんたうに立派な人で在つた。この立派な兄さんを、容れなかつたこの時代が詛はしい」と云ひレルゼが「もし、御主人を見損ふなら後の時代も詛はれた時代だ」といふ所で終つて居る。

第一幕第一場は、フランケン州シユワルチエンベルヒの宿屋に二人の百姓、メッツレルとジイヴエルスとが卓にかゝり煖爐の所に、バムベルヒから来た二人の騎兵が、居る。亭主も居る。

酒を飲みつゝ、メッツレルが、ジイヴエルスに、ベルリツヒンゲンさんの話を、も一度やれ、そこに居る奴どもが顔色を變へて怒るから面白いよと云ひ、あいつらは、ワイスリンゲンを送つて来て居るのだ、ワイスリンゲンは、二日もお城の伯爵の邸のお客になつて居ると云ふ。ワイスリンゲンとは、何者だと對手が尋ねると、バイブルヒの僧正の片腕とたのまれる男だが、ゲオッツさんの首を取らうとする奴だと云ふ。そして二人が盛んにゲオッツを賞め、僧正を悪く云ふ、騎兵が怒つて喧嘩になる、亭主が、喧嘩は外でしてくれと騎兵を追ひ出す、そこへ、ゲオッツの騎兵が二人来る。メッツレルが、ワイスリンゲンが、来て居り、今の奴等がそれの伴だと云ふ。そいつは、うまい獲者だと二人の騎兵が喜ぶ二人の百姓は、先刻の奴を、

やつつけようと出てゆく。

第二場森林中の旅館で、ゲオッツが、酒を飲みつゝ、僧正を逃したが、ワイスリンゲンを捕へ得るのは仕合せだ、と獨言を云ひつゝ、家臣のゲオルヒといふ、少年を呼ぶ、そしてハンスといふ家臣に、仕事の用意をせよと云へと云ふ。この少年が仕事に伴つて行つてくれと云ふ。此次ぎに伴れてやると勇敢な少年に約束する。そこに同宿の旅僧が来て、僧侶なる者の不自然な生活を話す、ゲオッツは、臣下に命じて、ダックスバハの街道の地に耳をつけて馬の蹄の音が聞えたら、通知せよと云ふやがて、聞えたとの通信がある。出かけようとする僧侶が握手を求め。右の手を出さない。それで僧は、ゲオッツだと知つて、偶然逢つたことを大變喜び、大名達に憎まれても、人民の難儀を救ふこの偉人をよくみせて下さつたと神に禮を云ふ。

次の場面は、ゲオッツの居城で、彼の子の可愛いカルルがゲオッツの妹マリアと語つて居る。マリアは、兄が捕へて来るだらうと思はれる、ワイスリンゲンを善い

人だらうと云ふと、ゲオッツの妻エリザベットが、悪い人だと云ふ。ゲオッツが、ハンス等と、ワイスリンゲンを生捕つて入つて来る。昔し一緒に小姓を勤めた関係でよく知つて居るので、親しげに口をきき、甲を脱いで、休めと云ひ、捕へて来たからつて、威張りはしないと云ふ。ワイスリンゲンは、家臣が運んだ着物に着更へる。ゲオッツは酒を持つて出て、自分の家へ歸つた氣で飲んで呉れと勸める。そして昔、交際の淺くなかつたことを云ひ、君は、御殿の女のことばかり氣にして、ブラバンドへ、行くことをしなかつたから、こんなことになつたのだ、全體君は立派な騎士であり乍ら、なせ、僧正の許に事へるのちやと詰ると、諸侯に味方をするところが何故悪いと云ふ。諸侯は比々、帝室を騙して、人民を苦しめるものだから、その味の味方をするのが悪いと云ひ僧正のした不正を擧げて攻撃する。諸侯は、横暴を逞しくする邪魔になる、己と、ジッキンゲンやゼルビッツを何とかして殺さうとして居るのだと云ひ、サア、君は女が好きだから、お前の噂をしてゐる女を相手に食

事せよと食堂へ誘ふ。

第四場、バンベルヒ僧正の宮殿内、食堂で、オレアリウスとリイベトラウトと、修道院主、僧正とが談話をしてゐる。こゝで、僧正が、ゲオッツは年來の敵だが、彼の運命も長くはないやうに計畫をしておいたといひ、ワイスリンゲンの事を激賞する。そこへ、ワイスリンゲンの家來フェルベルが、主人は、ゲオッツに捕へられたといふことを知らせに来る。

第五場ヤクトハウゼンのゲオッツの居城、ワイスリンゲンとマリアと戀に落ちて、あなたの兄さんが自分を生捕つてくれたのが幸福だと云ひ、マリアが兄はあなたを捉へにゆくまへに、あなたを幸福にすることが出来るだらうとの希望を有つて居りましたといふ。ワイスリンゲンが、あなたと愛しあふ樂みに比べれば、諸侯の覺え世間の喝采は、何でもないと云ふ。ゲオッツが入つて来て、僧正が、不正にも、自分の家來を捕へて歸す氣がない事、君をば手放すから、敵の助けをしないと云ふ誓

ひをしてくれといふと、よろしい、永遠に誓ふと同時に、この美しいマリアさんにくれといふ。ゲオッツが大變喜ぶ、ワイスリンゲンの家來フランツが入つて来て、僧正が、待つて居ることを告げ、なほ又、僧正の所に、アアデルハイド、フォン、ワルドルフといふ美しい後家が来て居る。是非一度バンベルヒに歸つて呉れと云ふ。

第二幕第一場、僧正と美人の後家アアデルハイトと、リイベトラウト等が、ワイスリンゲンを一度つれ歸つたら、この美人の方で、ゲオッツの方へ遣らないやうにしようとする。リイベトラウトが、ワイスリンゲンを連れかへらうといつて出立する。第二場、ヤクトハウゼンのゲオッツは、ゼルビッツと、ワイスリンゲンが、敵方の味方をしなくなつたのを喜んでゐる。第三場アアデルハイドは、女中がワイスリンゲンの歸つて来たことを語るのを聴く、女中は、あんな美男子は滅多にないと云ふ。主人が早く見たいと云ふと、奥様の御對手にもつてこいの人などと喋舌る。

第四場ゼルビッツが、ワイスリンゲンが、僧正の所へ歸つたのは、あやしいと云ふ、

ゲオッツが、ゲオルヒにバンベルヒの騎者が曾て着て居た衣裳を着せ、割符を持たせて、彼の地に遣し、ワイスリンゲンの様子を見させようとする。

第五場僧正とワイスリンゲンと面會す、次の二つの場面は、ワイスリゲン、アアデルハイドの家に入り、その美貌に魅せられる。そして、ゲオッツに濟まないと思ひ乍ら、そこに止まり、彼等の術中に陥る。第八場はワイスリンゲンの有様を、ゲオルヒが、見て、ゲオッツの所に歸つて報告する所で、その報告は、その後家と睦じさうにして居たこと、ワイスリンゲンに面會して意見を聴くと、ゲオッツが、隙に乗じて、契約させたのだから守る必要を認めないと云つたといふのである。それを聞いて、妹にすまない、ゲオッツが切齒する、言語道斷の無頼漢だと、ゼルビッツが憤慨する。第九場アアデルハイドはワイスリンゲンを、操縦する。ワイスリンゲンは、國會に出て、計畫を成功させるには諸侯及び僧正方へ君主を抱き込ませねばならぬ、さうして、貴女の領地を取戻し、自分の領地、僧正の領地の安全を計ら

ねばならぬと云ふ。場面が農家の婚禮に變ず、婿と舅とは八年間、公事をしたのだ。そして判事なんぞに不正の金を取られたことを語り合ふ。ゼルピッツとゲオッツとが、それを巡査に訴へよと勸める。そこへゲオルヒが、ニエルンベルヒの奴等が近づいたと知らせる。ゲオッツ等そこを出る。

第三幕、第一場ニエルンベルヒの二商人が、君主の通行を待ち受け上告しようとして居る。君側にはワイスリンゲンが附いて居る。君主はワイスリンゲンに向ひ諸侯の、誠意がないことを嘆く、二商人が、ゲオッツ等に品物を強奪せられたと訴へ出る。ワイスリンゲンが、陛下早く、ジツキンゲンとゼルピッツとベルリツヒンゲンを討滅せよと勸める。帝は、それでは、彼等を擒にして、自分自分の城の中に籠り、その定められた地城から出ないことを誓はせたいと云ふ。

第二場ゲオッツの所へ、ジツキンゲンが来て、妹マリアを妻にもらひたいと云ふ。ワイスリンゲンとの關係をうちあけると、それならば、なほさら貰ひたいと懇望す

る。場面が變り、官軍の陣所になる。ゲオッツを生捕らうと士官等が語つて居る。場面變り、ジツキンゲンが、マリアが、不意の結婚申込みに驚いたが、成就するかも知れんと獨語して居る所へ、ゲオッツは現れて、朝敵にせられ、官軍が迫るといふと、一緒になつて戦はうと云ふ。それは却つて不可だ。君が、こゝで朝敵になるより、萬一拙者が生捕られたら、嘆願して呉れ、女共もこの城へは、おきたくないから、手勢を貸すなら、集めて今一度来て、マリアが承知なら、伴れて歸つてくれといふ。場面バンベルヒの後家美人の家になると、フランツが来て、後家に愛情を示す。場面、ゲオッツの邸になる。フランツ・レルゼといふ、曩にゲオッツの腕を創けた男が、部下となりたいと申込んで来る。官軍が五十騎ばかり偵察に来たとき、レルゼを従へて、それを先づ、追散らさうと、ゲオッツが出る。つづいてその偵察隊が、惱まされる。ゼルピットとゲオルツは朝敵にせられたのは、ワイスリンゲンの計略だと話し合ふ、つづいて戦ひの場面、ゼルピッツ負傷、ヤクトハウゼンでは、

ゲオツツが、ジツキンゲンとマリアとを、禮拜堂で夫婦の誓をさせて、それが終ると、この場を立退かせようとする。マリアが立退きを容易に承諾せぬ。それは後の慮りが無い仕業だと諭して新夫婦を去らせる。敵が近づく。

籠城の場面、兵糧に不足を感じる。官軍は條件附で捕虜になれと云ふ。レルゼが開城の談判を試みに出てゆく。ゲオツツやエリザベット兵卒等が、僅に一瓶のこの酒をのみ君王と自由の爲めに萬歳を叫ぶ、レルゼが歸つて来て、あなたが僅に、馬と甲冑と銃とのみを携へて出てゆくならばよいと云つたと告ぐ。官軍、ゲオツツ等の出てゆくのを殺さうとするさまを兵卒が見つける。第四幕第一場、ハイルブロンの宿屋にゲオツツが居るエリザベットが登場する、二人で、陛下の御言葉に掛けて誓つて置き騙詐して、ゲオルヒやフランツを官軍側で捕虜にし、鎖で縛つて居ると思ふと耐へられないと残念がる。裁判所の使者が議事堂に出頭しると云つて来る。第二場議事堂、地方議員が脅力のあるものを集め、ゲオツツをいつでも取押へる用

意をしてゐると、帝室派遣議員に報告する。そこに、ゲオツツが入つて来る。派遣議員は、ゲオツツが自分の家來の身の上に就いて尋ねても何にも云はないで、陛下に對し國家に對し叛逆を謀つたといふ如き文書に署名させようとする。肯じない。合圖に由り、武器根棒を携へて市民が迫る。ゲオツツが一人を倒し一人の武器を奪ひて、誰でも寄つて見よといふ皆恐れをなして躊躇する。派遣議員ももてあまして居る所へ、ジツキンゲンが二百餘人の軍隊を統率し、官軍のゲオツツに對する誓言破棄と、ハイブロン市役人の助力とに對し理由が聴き度いと、市の關門に迫つたとの通知が達す、一同畏怖してゲオツツにジツキンゲンを、なだめるやうにと派遣議員が云ふ。戸口に近づいて居るエリザベットに、ゲオツツが此の席へジツキンゲンを呼び入れて呉れと云ふ。第三場、市の議事堂でジツキンゲンは官軍の所業は、陛下の思召ではないのだ。自分はやがて宮中に出て、計畫を進めたい。暫く待つて呉れと、ゲオツツを慰める。場面變つて、アアデルハイドとワイスリンゲンとが、

ジツキングデンとゲオツツとを悪口し、派遣議員達の無能を笑ひ、陛下が、心の底に彼等を愛するのを、いましく思ふ。併し、ワイスリングデンは、到底、ゲオツツが約束通り、自分の城に籠つては居ない。その機会に彼を陥れるのだと胸中の物語る。アアデルハイドが、陛下が老齢で、崩御遊ばしたら、カルル殿下が後を繼がれると、活潑でよいと云ふ。カルル殿下が常に、此の後家を寵愛すると睨んで、嫉妬して居るワイスリングデンは、宮中出入をよしてくれと云ふ、それは承知出来ないと答へる。ワイスリングデン退場後、カルル殿下からの手紙を持つて、例のこの美人に戀慕してゐるフランツが現れ、その情を訴へる。女が引きよせる、接吻する。

第五場ヤクトハウゼンでは、ゲオツツが、城外に於て前のやうに活動出来ないのを耐え難く感じると云ふ。妻がお書きかけの自傳を完成遊ばしたら、敵もそれを見て耻ぢませうと勸める。レルゼと、ゲオルヒが登場して、陛下の重病なこと、國內に百姓一揆が起り、諸方を荒して居ることの噂を話す。

第五幕第一場は百姓一揆の暴亂と、村民避難のさまを表して居る、次の場面、ゲオツツに、一揆の隊長になつてくれと、コオル、キルドなどが懇望する。今後既往のやうな亂暴をしないならば、四週間だけ頭首になつて遣らうと約束し、その間レルゼを妻の許に置かうとする。一揆の中のメツツレルとかリンクなどは、コオルやキルドと意見を異にして、別動隊を組織し亂暴を續ける。

第三場或山谷の粉挽場からワイスリングデンが出て、フランツに、アアデルハイドの許に往き、此の手紙を渡し、あの宮中から出て、拙者の城へ移るやうに勸めて呉れと立たせる、その前に使者が来て、百姓一揆が仲間同志意見を異にしたことと、やがてそこを通過すると知らせる。場面が變つて、ヤクトハウゼンでは、エリザベツトが夫が、懇望せられたとは云へ、百姓一揆の首領になつては叛逆人と云はれても云ひ開きが難かしからうと、心を悩ます、レルゼが慰める。ジツキングデンのマリイへ手紙を届けてくれとレルゼに依頼する。場面變じて、ミルテンベルヒの焼ける

のを見て、ゲオツツが、己の意見を用ひないのならば、首領たることを辭す、ジョオルヒは馬を馳せてあそこにゆき己の考を告げよと立たせる。あとで、こんな仲間から早く脱する道としては、毎日、一揆の仕事の邪魔をして、解約をあちらから需めるやうにしようといふ。所へ名を秘したる或者が現れ、首領として餘り嚴格なので、足下を除くと云つて居るから立ち退くか、少し寛大になさいと忠告して去る。官軍に追はれて百姓が數人逃げて来る。ゲオルヒが官軍に捕はれはしないかと、ゲオツツが氣を揉んで居る所へメツツレル等が来る、メツツレルの無禮を憤り、ゲオツツが鐵拳で打倒す。そこへワイスリングゲンが騎者を率へて、手負ひだと聞くゲオツツを捕へよと下知す。第六場第七場で森の中で、ジブシイが數人野宿して居る所へ、劍に惱みつゝ、ゲオツツが来て、助けてくれといふ。一人が、ゲオツツだといふので、彼等が、名譽として、介抱する。官軍が迫つて、生捕にする。第八場アアデルハイドの寢室に、フランツが来て抱き付く、アアデルハイドは、ワイスリング

ンが、妾を、彼の城につれ込み、それから尼寺へでも追ひ込み、不自由にする考らしいといふ。フランツが、ワイスリングゲンを殺すといふ、毒で殺せと後家が、方法を教へる。第九場ゲオツツを入れてある牢獄の前に、エリザベットと、レルゼとが、夫と主人を氣遣ふ。レルゼは、ワイスリングゲンが、委員になつて、慘酷な刑を執行し、メツツレルが生き乍ら焼かれたといふ。それを聽いて、彼が刑の執行委員なら、マリイを、遣つて夫の身の上を助けるやうに訴へさせて見ようといふ。

第十場ワイスリングゲンが、身體が衰弱したのに驚いて居る所へ、マリアが入つて来る。そして兄を助けてくれと云ふ。フランツを呼んで、死刑宣告書を運ばせそれを裂いてしまふ。フランツが、主人の膝に泣き倒れる。そして、アアデルベルドの意見に従ひ自分が手先につかはれ毒をのませたと云ひも終らず、窓からマイン河へ飛び込む。マリアは、ワイスリングゲンをやさしい心で慰める。場が變じて秘密裁判所となる。アアデルハイドは姦通罪を犯し、夫を毒殺したことによつて、死刑に處



することになる。第十二場レルゼはマリアとともに、ゲオツツの在る牢獄へ急ぐ。第十三場及び十四場牢獄では、エリザベットが、弱り込んで、庭にさして居る春日に暖りたいといふ夫を慰める。牢屋の外にマリアとレゼルが登場するエリザベットが現れる。マリアが、兄の命が助かつたことを告げ、ワイスリングンが、妻に毒害せられたこと、夫が諸侯から危険な地位に置かれて居ることを語る。エリザベットは、ゲオルヒが、討死したことを語る。番人に許されて、日に暖りにゲオツツが出てくる。妻が僧院に居る息子を呼ばうかと云ふと呼寄せるに及ばないと斥ける。そしてゲオルヒが花々しく討死したと聞き、勇ましい最後だつたと喜び、レルゼを目の當り見ることを喜び、妻の今後を頼んで、自由を口にし乍ら倒れる。妻と妹と、レルゼとが、死んでゆく人の徳を讃へる。

此の戯曲は、印刷工場を、開業したメルクが印刷し——七十三年の夏に世に出た。ゲエテの豫期」上に、好評を博し、翌年四月に、ベルリンで、上場せられた場合の

如きも大入であつた。この脚本は、佛蘭西趣味に囚はれてゐるものには、驚異であつたに違ひない。レッツィングは、自己の名を危くする勢力を嫉んでか、此の作に對して、感心しないと云つたが、極めて少數の人を除いては皆賞讃した。ヘルデルにしても、第一稿を見て、彼の僻を發揮して著者には、耳の痛いやうなことを云つたものゝ、内心には感動してゐたのであるから、今回の改作に對して、悪評はしなかつた。崇拜者は非常に多く、フランクフルトの人、クリンゲルや、ゲエテの友人でゲエテが、フリードリイケと別れた後でその袖を引いた、詩人レンツやが、野心を起して、己れもゲエテ程のものを書かうと努力したが皆及ぶべくもなかつた。

### 「若きエルテルの悲み」「ステルラ」

ゲエテは、フランクルトの名士の一人となつた。朋友は彼の才能を愛し文學に深い関係のない者までが、知合ひになりたいと訪問して接客に多忙であつた。如何に多忙でも、名聲が高まつても、ロツテのことが忘れられないので悩んだ。彼は彼女の影畫かげゑを、部屋にかけて、今では既にケストネルの妻になつて居る彼女に對して、なほ、戀の情を起し、寂しみを感じ、臥床ふしどの側に、短刀を置いて、消燈前に、胸を刺し得ないかを試みたこともあつた。——七十三年の秋には、妹のコルネリアと、シユロツセルとの結婚式が行はれ、二人はフランクフルトを見棄て、エンメンディングンゲン Emmendingen に移つた。いま、非常に親密であつた妹が居なくなつたので、物思ひに沈むことが一層度重なるやうになつた。所へ七十四年の一月に、マクシミリアネ、ラロツシユが、フランクフルトで商業をしてゐる伊太利人のペエテ

ル・アントン・ブレンタノ Peter Anton Brentano といふ五人の子のある男へ嫁して來た。その結婚は幸福なものでなく、夫婦はよく喧嘩をした。ゲエテは前から、夫人を知つて居るので、度々おとづれて、生活の上にも世話をする。それを嫉妬深い夫が、これは自分の妻を姦通して居るのだらうと誤解し、はじめの程はゲエテを、招待するやうにして居たがいつしか態度を變じ、或日、亂暴に、侮辱したので、詩人も、再びこの家を訪ふまじと決心した。

これより前七十二年の末に、ゲエテは、エルサレム Jerusalem の自殺を聞いた。このエルサレムと云ふのは、ゲエテが、エツツラルにあつた頃の食卓仲間の名を列して居り乍ら、厭世が、そこへ出ることを許さなかつたブラウンシユワイヒ Braun Schweg 公使館の書記であつた。人妻を戀し、失望した一瞬にビストルで自殺したのだ。その通知をケストネルから得た時に、その男に、自分が他人の許婚者であるロツテを戀した感情を結び付けて一つの戯曲を書かうと思つた。然し、着手するに

至らなかつたが、後このブレンタノの妻に於ける自分の愛及びその家の空気をも多少取り入れて戯曲でない、書簡體に書かうと、筆を執つて、——七十四年の三月初に至り、脱稿した。それを書くに當つてペンは流るゝが如くに運んだ。その理由は主人公エルテルは彼に比して病的であるにしても彼の心持を多く注ぎ込こむ便宜ある作物であつたからだ。これが有名なる「若きエルテルの悲み」である。この *Die Leiden des Jungen Werthers* に書簡體を選んだのは、リチャドスンとルソオに影響する所が多い。特に後者の *La Nouvelle Héloïse* の精神は、エルテルのそこへ、こゝに呼吸して居る。併し、ルソオの該著は、過去の書物として文學又は歴史研究の少數者にだけ讀まれてゐたが、エルテルは、今も盛んに讀まれそして又、新味を失はない。

エルテルは不健全な心の記録である。この點に於て十八世紀の散文界に優越の地步を占める。ゲエテはこれ以上の散文を書かなかつた。エルテルの病氣は個人の病

氣ばかりでなく實に時代のそれであつたのだ。思慮ある人々は、周圍の腐敗に耐へられなくなつた。然し古い理想に代るものが未だ確固と定まらず、適從する所を知らないで、彼等自らの思慮に籠り、感傷的になり、沈滯無變化を忌み、乾燥した宗教で壓迫しようとする空氣から逃れたいと云ふ感情が、内に流れてゐた。然れどもそれは纖弱で煩悶の埒の中に在つた。そこへゲエテが、それらの心持に觸れた多感多情のエルテルといふ男を主人公にした此の書を出したのであるから、非常に歡迎せられた。勿論、因襲的で無く、人間の呼吸が生々と通つてゐるだけに、頑冥にして新文學を憎むものから、悪く云はれたが、それだけ力強いことを示すことになり、他國語に翻譯せられて全歐洲に廣がつてしまひ、青年男女の口に、エルテルの名が上ることといよゝ多くなり、エルテル熱に浮かされて、主人公エルテルの着衣である青地の上衣、黄色いチョッキ、長靴が流行したと云ふ。彼のナポレオンの如きも七度も愛讀し埃及の陣營へも運んだと傳へられる。支那、東鞏鞏方面に於ても、

エルテルやロツテが土地の畫家の手で、硝子に、畫かれたとも云はれてゐる。随つて模倣の冊子も夥しく出た。

『若きエルテルの悲み』の梗概は、青年エルテルが、自然を愛して、そこくと、景色の佳い所を、歩き廻り、ホメロスなんかを愛讀して樂んでゐる。或晩、舞踏會へ、踊り手である娘とその伯母とを馬車で、會場へ連れてゆく途中、シャルロツテといふ女を誘ひに寄る。雨でも降つてきさうな蒸暑い暮なので、エルテルは、森の多いその庭へ下車する氣になり下りて、家の前の階段を上り口へ行かうとした時、玄關で、十一歳以下二つまでの六人の子供が、美しい小女を圍み、その少女の手から、銘々、年と腹の具合に適するやうに配つて呉れるのを待つて居り、愉快さうに貰つて夜食をするのを觀て、恍惚とした。そしてその少女から、「お待ちせしたり、こゝまでお足をお運ばせしてすみません、着換をしたり、留守の間のことを、こまこまと始末しておきますのでつい……」と丁寧云はれて、いよいよその音聲なり

舉動なりに、魂を奪はれた。同車して、舞踏場へゆき、互に愉快に踊り廻る、ロツテの腕をとつて居ると或婦人が、シャルロツテに向つて、威すやうにアルベルトと云ふ名を呼んで指を立てた。誰かと尋ねると、アルベルトは、妾の許婚の名だと云つた。雷が鳴り出したので、顔を顰める人達も多くなつたが、この少女は、この場の空氣を引立たせる遊戯を申し出て、椅子を圓く並べそれへ皆をつかせ、その中で少女が右から左へ疾走する、そして自分の前になつた時、銘々自分の番號を云ふ、數は千までと限る、間違へたり、云ひおくれたものに對しては、少女が耳を打つと云ふのである。これが面白く、エルテルも、二つ三つ可なり強く打たれた、後刻雷鳴もやんだので、面白く談り、馬車を同じくして少女の家へ歸つた。そして別れに今日中にまた伺ふといふ約束をした。それ以來この多感多情の青年エルテルは、足繁くその家を訪問する。アルベルトは、實直な官吏で、エルテルに對し、惡感情を抱かない。それはその心からでなく、可愛らしいロツテのしむけによるのであつた。

エルテルは許婚の多忙でロツテの所に居ない時刻を見計つて訪問する。

子供達が、馴染んで、ロツテ同様に、彼の来るのを待ち、お伽話をねだり、麩麩を切つてくれと云ひ、彼がロツテの代りをするやうになる。

併し、或晩、どうしても、思ひあきらめて、この土地を去らうと、心の底に決心して、ロツテを訪ひ、アルベルトと三人で夜食後、栗や、山毛櫨の圍繞してゐる段丘に立つて月を仰いだ。ロツテは、月を見ると、亡母を想ひ出す、そして死と未来とについて考へます、未来で、母には逢へないものであらうか、あなたともいつかお目にかゝれませうかと云つた。エルテルは、必ず、この世でも、來世でもまたお目にかゝれませうと答へる。ロツテはなほ亡母を忍び、臨終の有様を語り、あなたが母を知つて居られたら、母は、あなたに懇意にしてもらへたでせうといふやうなことも云つた。夜が更けて、わかれる際に、エルテルはロツテの手を握つて、「お別れしますが、またお目にかゝりませう、お互に探しあひませう、私は去ります、

然し、永久には云ひません、アルベルト君、ロツテさん、またお目にかゝりませう」と云ふと、ロツテは、微笑して「明日でせう」と云つた。彼はその言葉を身に染みるやうにきいて、二人に別れてから地上に泣き倒れる。

それから、他の公使の所に在つて勤めても、公使と氣が合はない、胸には、始終ロツテが往來する、アルベルトが結婚したときいた時、壁にかけてゐるロツテの影書を取り去らうと思つてゐたが、取り去らないで、なほ私は彼女の胸に第二の位置を占めて居ようと思つてアルベルトに書いてやる、役所に辛抱することが耐へられないで辭職する。ロツテの所に再びゆきロツテと逢ひ、ロツテの胸を一度だけでも自分の胸に押しあてたいと思ふ。そしてそんな慾望を起してゐることを悟つてやさしい眼をしてじつと見る心持を感じながら、夫のある女だと心を押へる。

そして或日、一人の氣の違つた男に逢つたその男は、ロツテの父の書記であつたがロツテに懸想してゐることが知れて解雇され狂氣したのだと知つて、わが身の上

に思ひ及ぼして嘆く。そして、アルベルトを殺すか、三人の中、誰かと死なせければならぬと考へ、自殺する氣になり、この世では、アルベルトがロツテの夫だが、あの世で、自分の父やロツテの母を探して、この心を打開けて、ロツテを待つて居ようと思ひ定め、旅行するに就き、ピストルを借りたいとアルベルトに申し込み、その借りたピストルで自殺してしまふ。

『エルテルの悲しみ』は、全體が、書翰體である故、順々に、それを讀んで行く所に、興味がある。

これを十ヶ月前發行した、『ゲオツツ』に比較すれば、同一人の手に成つたものとは思はれないほどの差がある。前者は、剛健勇猛の、老騎士が主人公であり、これは、多感多情の若者の戀愛の悩みである。彼の文士としての大きさが、この兩者の差違の顯著な所にも觀られる。

——七十四年、エルテルの外に作つた物とその翌年作つた物とは數に於て少く無

い。ふざけた諷刺滑稽劇もあれば、音樂的喜劇、典雅な歌謠、浮氣者の感傷を描いた劇と云つたやうに。その中、『神と英雄とキイランド』Goetter, Helden und Wielaと題した散文滑稽劇がある。これは、ワイマルに在るキイランドに對して諷刺したものである。その他『ブルンデルスワイレルの年祭』Jahrmarsfest Zu plunders wihern 『ジアマイル・ブレイン』Pater Brey 『サチロス』Satyros 『ヘルキンとヘルミン』Erwin und Elmire 『キルラ・ベルラのクラウヂネ』Clandine non Villa Bella がある。『ケエザル』Caesar も多年書かうとして居たので、大分筆を進めたらしい。『マホメット』Mahomet, も、同様である。然し、彼の満足するまでに出來上らなかつた。『プロメトイス』Prometheus は、二幕作つた。又有名な『クラキゴ』Clavigo を作つた翌、七十五年四月『ステルラ』を書いた。『ファウスト』は、ただ準備的に、筆を執つたに過ぎなかつた。

『ステルラ』Stellaは、『ステルラ』と『ワネツサ』との二人の女に關係して居る。

「スキフト」の奇妙な話を、心に抱いて書いたもので、その女主人公の熱烈なパッションの力を表さうとした。

フェルナンドオといふ男が、戀したチエチリイと結婚した。然し彼は彼の自由が妻と娘とによつて、非常に、制限せられてあることを感じ、彼等を見棄てる。そして、ステルラに愛着する。然し又、ステルラをも見棄てる。後、ステルラと、もとの關係を結びたい希望を抱いて歸つて來ると、彼女と同時に、チエチリイと娘とを發見した。娘は、ステルラと朋友の關係に居る。そこに於て、どちらの女を選んだら可いかといふ彼の苦悶が始まる。チエチリイが、二人の女が一緒にあなたと住んだらどうかと云ふ。ステルラが、心から同意したので、彼は喜んで、二人を妻にする。然しゲエテは、三十年後、終りの幕を改作して、フェルナンドオが、ピストルで自殺し、ステルラが毒を飲んで死ぬることにした。——七十六年一月發行せられるや、作者は、直ちに、一冊を、リリイに贈つた。このリリイが、ステルラ中に多

少フリイデリイケが、チエチリイの中に多少、フェルナンドオの中に、作者が多少取り入れられてあるらしい。「クラギゴ」はこれよりも、評判は、よくなかつたらしいが作者は、得意であつた。

ゲエテは、「クラギゴ」「ステルラ」等を書いた頃、スピノザ Spinoza の、倫理學を讀み、大いに得る所があつた。スピノザは、ゲエテが未だ思想上達し得なかつた所へまで彼を導いた。スピノザの「エテックス」Ethics が多大の感化を彼に及ぼした。彼は後年にも數々此の書物を読み、得る所が多いと云つたとか。随つてスピノザは彼に利益を與へることが多かつた。

## 「クラキゴ」

フランクフルトに、「結婚遊び」と云つて、抽籤で、男と女とが結び、凡、一週間、夫婦になつた真似をして遊ぶ遊戯が行はれた。

ゲエテは、十六歳ばかりの、無邪氣な可愛らしい少女を、三度續いて、籤で引き當てた。そしてその少女が氣に入つた。或日、此の遊戯に加はつて居る人達が集つて居る際、ゲエテは、ボオマルシエ *Beaumarchais* の記念録 *Memoire* 第四を讀んだ。それが終つた時に、その少女が、「お讀みになつた中の一人物、クラキゴを戯曲にお作り下さつたら、嘸、立派なものが出来ませうに、私は、あなたの女主で無いから、作れよと命するわけには、いかないのを残念に思ひます」と云つた。「よろしい、早速、戯曲にして見せませう」と約束して着手した。そして成つたのが、「クラキゴ」 *Clavigo* である。

ボウマルシエに、二人の姉妹があり、一人は建築家ギイルベルトと結婚した。残つたマリイ・ボオマルシエは、クラキゴと云ふ男と約婚した。その約婚があるに係らず、クラキゴは、自己の位置が高まりかけると、マリイを厄介者視して見棄てる。乃で、ボオマルシエがクラキゴの在る所に往き、その約束を保たしめようとす。クラキゴが恐れて承諾したもの、力を以て結婚を強制するとして、彼を追拂はうと計畫する。これを悟つたボオマルシエが王の許に、クラキゴを訴へ出で、官職を取り上げさせると云ふのが記念録の要領である。

ゲエテのクラキゴは、面白く書かれて、ボオマルシエの及に、クラキゴが刺さる、マリイの死骸の側に横はるのだ。

第一幕第一場ではクラキゴと友人のカルロスとが出て、週間雜誌の話、マリイの話などをする。第二場は、マリイの同胞、ゾフィイの家で、ブエンコオといふ、マリイに懸慕して居る男と、マリイとゾフィイとが、此處へ遣つて来る筈のマリイの



同胞ポオマルシエエに就いて噂をしたり、クラキゴに就いて、憎しみの情を洩らす然し、マリイは、棄てられたに係らず、クラキゴを未だ慕つて、クラキゴを悪口云ふ場合辯護したり彼の人が王様の書記におなりなさらない内、私の家へ初めて見えたる頃などは、本當に妾の爲めには、名も地位も幸運も物かはといつたやうな風であつたのにと嘆いたりする。ゾフイイの夫が入つて来て、ポオマルシエエの到着を知らせる。一同と彼と面會する。

第二幕第一場は、クラキゴの家で、ポオマルシエエとセント、ゲオルグとが訪ねて来る。そして長々と、クラキゴが、マリイの許婚になるまでの顛末や、マリイが、彼の雑誌發行に多大の同情を持つたこと、それが盛大になつたこと、彼が亂暴にも、マリイを捨てたこと、それを知つて、マリイが死ぬるかと思はれる程の、痙攣を起したことに、マリイの姉が、悲しみに耐へず佛蘭西迄通知したので、その同胞たる拙者がはる／＼と、パリから此の、マドリイドに来て、非常な決心を持つて、脊徳の人

に今、對面して居るのだといふ。そして、佛蘭西から態々来て呉られたこの紳士の前で、自分の同胞が、君から、あんな目に遇はされる理由を述べよと迫る。クラキゴが、貴殿の姉妹のマリイは盜れるばかりの、機智、溫和、善良を持つ淑女であると答へる。彼女が、あなたの不平に價するやうなことをしたかと尋ねると、決してないと答へる。それなのに何故、死ぬるほど少女を苦しめる非人間的行爲をしたかと詰る。クラキゴが、それから重ね／＼苦しめられる。終に、マリイを妻にくれと云ふ。それは既に過ぎると拒む。そしてポオマルシエエ側の主張に對する是認證を求め、書く。ポオマルシエエが立去る。あとに、カルロスが来る、クラキゴは、ポオマルシエエが、決闘か、是認證書かを求めた事、マリイと結婚しようと思つたことを打明ける。

第三幕第一場では、ゾフイイと、マリイとクラキゴのことに關して語る。ゾフイイの夫とブエンコオが入つて来る。彼等のいづれもが、この戀愛事件について語る。

ゾファイイの夫はマリイが、まだクラキゴを思つて居るのだと云ふ。クラキゴが入つて来て、熱烈に、マリイに對しての愛情を示し、うれしげに手に接吻する。そして、マリイが、「おー、クラキゴ」と云つて、なすがまゝにして居るのを見て、「まだ私を愛して居る」と喜ぶ。ポオマルシエエが入つて來ると、クラキゴが、「おー、私の兄弟」と近寄る。ポオマルシエエが、マリイに、許したかと云ふと、「妾、氣が遠くありません」といふ。皆で、彼女を助け去らしめる。ポオマルシエエが、ブエンコオに、「彼女は彼を許したかと尋ねると、『そんなに見えませんでした』と云ふ。クラキゴはゾファイイの手に、接吻して、天が下の最も幸福な身などと云ふ。その態度に、偽りが無いと見て、前に書かせた、證書を返す。

第四幕第一場、クラキゴの寓、カルロスが待つて居る所へ、クラキゴが歸り、マリイは天使だ、彼等は優良な人物だなどといふ。それに對して様々の言葉を弄して、この結婚を成就させまじとする。君の配偶になれば、位置の高いもの、美しいもの、

富んだものが、望んで居るのだとか、彼女は、肺病である、肺病の妻をもつたものは、夫の不幸なるのみならず、子、また孫もその爲めに不幸を見るとか、散々妨害した上に、この誓約を破棄せよと云ふ。意志の弱いクラキゴは動かされて終ふ。第二場は、ゾファイイの家で、姉妹が、仕事をしつゝ物語つて居る。マリイは、クラキゴを、愛嬌者などと賞める。ポオマルシエエが、入つて来て、ゾファイイに夫はどこへ行つたかと尋ねる。その様子が、平生と違ふと見て、マリイが隠さず事情を知らせて呉れと云ふ。何でもないと、なだめても容易に落着かない。クラキゴの家に行つた所が、玄關番が、主人は不在で、どこへ往つたか解らないと云ふのだ。若し、彼が身を隠したとすれば、どこへ行つたか、どう云ふわけか知りたいたのだと云ふ。ゾファイイが妹の、様子を見て、水の入つた杯をさし出したりして勞る。間もなく、ゾファイイが、大使から飛脚が來たといつて手紙を、ポオマルシエエに渡す。讀んで、身を震はせるので、マリイがそれを見たがる、ポオマルシエエは、

椅子に身體を投げ掛けて手紙を投げる。姉が讀む。マリイが、起上らうと試みて、あゝ妾を殺す打撃であらう、彼の人が裏切つたのであらうと云ふ。ボオマルシエエが立ち上つて憤慨する。ゾファイイの夫が入つて来る。ゾファイイが夫に、クラギゴが、ボオマルシエエに對し、刑法上の訴狀を提出した、理由は偽りの名前を用ひて、入り込んで来て、ピストルを突付て、醜陋なる是認證に、サインするやうに強ひたと云ふのです。そして早く國から退かなければ、牢獄に投じるといふのですと告げる。ブエンコオが入つて来る。この男もクラギゴの所在を知らぬ。クラギゴの名を呼びつゝ、マリイが、死んで終ふ。

第五幕第一場は、夜中、ゾファイイの家の前の街路で、其の家の戸は開かれて在る。クラギゴが、外套で顔を隠し、松明を持つた従僕を前に歩かせて來掛り、この街路を避けるやうに汝に命じたのだと云ふと、従僕が、これを通らないと大迂回になる。あなだが、急いで居られるものだからこの路へ來た、モー直きに、カルロスの宿で

すと云ふ。従僕が、葬式だと云ふ。マリイの家からだとクラギゴが知り、従僕に命じ、誰の葬式かを問はせる。マリイのと知つて、心の平靜を失ふ。第二場、悲嘆にくして、マリイ、私をお前と一緒に収れと、家へ突き進み、第三場は、ゾファイイの夫、ブエンコオ、悲しうに居る所へ、「止れ」とクラギゴが入つて来る。そして、棺に近づき彼女を見て泣く。第四場は、その所へボオマルシエエが入つて来て、棺側に泣く、クラギゴが、そちらに立つて居るのは誰かといふ、その聲を聞いて、正しくあの聲はと立ち上る。クラギゴが、私だと云ふとボオマルシエエが劍を搦んで、迫る、クラギゴも拔劍して戦ふ、忽ちにクラギゴ倒れる。第五場はゾファイイが、どうしたのかと現はれる。クラギゴが、その手に接吻して、殺されたことを喜ぶ態度を示す。第六場は、クラギゴの従僕とカルロスが現はれる。クラギゴは、マリイの手を握り、そして最後の新婚の接吻と云つて、接吻して死んでゆく。

『クラギゴ』には、ゲエテ自身が、フリーデリイケに對して、肺病であるかを疑

つたりして見棄てたことの、心の悩みが織り込んである。されば、病身のマリイは、フリーデリイケで、マリイに戀慕して居る所のプエンコオには、レンツが幾分取り入れられてある。

### リリイとの戀

一千七百七十四年の十二月十一日に、ワイマル *Weimar* 宮廷の十七歳になる公子カルル・アウグスト *Karl August* と弟のコンスタンチン *Konstantin* とが、パリイに往く途中、フランクフルトに宿つた。クネエベル *Knebel* といふコンスタンチンの師傳をしてゐる文藝愛好者で兼て、エルテルを愛讀してゐる詩人としても多少知られてゐる大尉が彼を訪問して、ワイマル兩公子に面會せよと勧めるので、その宿所に公子を訪ねた。一行中には、兄なる公子の師傳、ゲオルツ *Goern* 伯爵及び、院長のフォン・シュタイン・コツホベルヒ *von Stein Kochberg* などが居た。一同とゲエテと語つてゐる際に、卓上にその頃發行せられたユストス・ミヨオゼル *Justus Moser* の『愛國的空想』の第一卷があつた。一行から浴せかけられる同書に對しての質問に極めて丁寧且つ透徹した見解を披瀝して答へたので、この若い世襲公子

が詩人の上に深い感銘をなした。十三日に、居残つた、クネエベルと詩人とが、マインツに在る公子等の宿所へと進んだ。兄公子はこの若い詩人の人格に感じて、何とかしてこの人を後日ワイマルへ招きたいと思つたらしい。マインツ Mainz で、詩人はクネエベルに數多の詩稿を與へた。それをクネエベルは、公子の爲めに讀んだ。その中に無論、歌劇、エルキンとエルミレもあつたであらう。

フランクフルトに於けるゲエテの生活中ではシヨオネマン Schöenemann 夫人の娘 アンナ・エリサベツト Anna Elisabeth 呼名リライ Lili との戀が最も深かつた。リライは弟や及び母と住んでゐた。母は、富んだる銀行家の未亡人である。フランクフルト社會では最上の階級に位して居り、殆んど毎夕、友人を招いて遊んでゐた。

——七十五年の新年の或夜、ゲエテもその家に往つた。そして初めて、リライを見た。十六歳か十七歳かの彼女は美しい髪青い眼を持ち動作に於て優雅艶麗人の眼を喜ばせた。集つて來てる人の間を、極めて平氣に悠然と動いた。フリーデリイ

ケ又は、ロツテとは趣を異にした美人であつた。詩人はその美容に忽ち愛着した。彼女もまた、その愛に對して此の美しい若い詩人に對して冷淡であり得ず、互に、親んだが、ゲエテは、その家の、豪奢過る生活に對して少し困つた。そして又、出入する人達と肌が合はないのに迷惑した。又、彼の家の人々が、詩人を理解しないのに苦しんだ。ゲエテの家でも、シヨオネマン家を好まない。既にそれだけの障壁があるから、二人の愛情は濃厚でも致し方がなく、二人が惱んでゐると、兩家を知つてゐる、ハイデルベルヒ Heidelberg に住んでゐるデルフ Delf と云ふ五十歳ばかりの女が、フランクフルトへ來てこの事を知り、兩家に交渉し二人を夫婦にすることに定めた。その時、リライは、金の小さい心臟形をリボンで結んで、ゲエテの首へ結びつけた。

それに係らず、また／＼兩家の不調は遂にゲエテをして、到底この美人と、夫婦には當分なれないと思はせたので、煩悶の日を過して居ると、正月にストルベルヒ

Stollberg 伯爵家の息子、クリスチアン Christian とフリードリヒ Friedrich とが、途中であつた男爵クルト・ハウグキッツ Kurt Haugwitz と來りゲエテ家で酒を飲み、フリードリヒが暴君の血に静め難き渴きを覺えるといふやうな詩を吟じた。ゲエテの父は、わが子と年齢の近い伯爵家兄弟の血に渴したやうな詩を聞き、頭を振つて笑つたが、母親は酒倉へ行き、古く最も美味な酒の壺を持つて來て『こゝに眞の暴君の血があります、それで、あなた達は、お楽しみなさい。そしてそれで、殺人について考へることはおやめなさい』と云つた。この一事にも、ゲエテの母の殺人なぞを痛く厭つた性質が見られる。

伯爵兄弟は、シュワイツ Schweiz へ往くので、旅にゲエテを誘つた。そこで四人は青色の上衣、黄色の胴衣、同じ色のツボン圓い灰色の帽子といふエルテルの揃ひの服を着てフランクフルトを立ち、ダルムスタットにメルクを訪ひ、カルルスルウエ Karlsruhe でワイマルの兄王子の未來の妻たるルイイゼ・フォン・ヘッセン・ダルムス

タット Luise von Hessen Darmstadt に謁し『エンゼル』だと人への手紙に賞めて居る。ストラスブルヒにレンツ Lenz と逢ひ往年數々行つた旅館で二十四日に共に食事となし、ザルツマンにも面會した。そこで暫く同行者と別れてエンメンディングン Emmendingen に妹コルネリアを訪ひ、チュウリヒ Zuerich で伯爵兄弟と再び一緒になつたがアインジイデルン Einsiedeln からチュウリヒ以來、行を共にしたバツサワ Passavant と云ふ二十三歳の神學生と二人で旅を続け六月二十三日ゴットハルト Gotthard の山頂で絶景を賞し、リライのことを思ひ、例の首に飾つてゐる金の心臓ハートに接吻した。二十五日チュウリヒにつき十日ばかり滞留しストラスブルヒに歸り、そこでチンメルマン Zimmermann に面會し、ダルムスタットで、ヘルデルに會つた。ヘルデルは、別れて居た二年間に甚しく、人が變つたやうに前のやうに險しくなくなつてゐた。ゲエテは彼夫妻を伴ひ、七月二十二日フランクフルトに歸り着いた。歸つてからも、リライとは何度も、オツヘンバハ Offenbach などで會つて、女の

口から、亞米利加へでも伴れて逃げて呉れといふやうなことも云はれて居るに係らず、リライが、他の男に、彼の家で、交際するのを見て、嫉妬したり、彼女の家人が彼を排斥しようとする事の容易ならぬを感じたりして、思ひ切らう、思ひ切れないと懊惱してゐる頃に、カルル・アウグストが、ワイマルの當主になり、——七十五年九月カルルスルウエに在るルイイゼを妻に迎へて歸る途中、フランタフルトを過ぎて、是非ワイマルに来てくれと、懇ろに招かれたので、父には反對の意が少し位あつたやうだが、それに應じる旨の約束をした。公爵は喜んで、不遠、迎への使者を寄こすと云つて去つた。

待つてゐても、迎へるのが來ないので、父は、公爵の約束を信じないで伊太利に遊びにゆけといふので終に行く氣になり旅の用意をして、まづ、ハイデルベルヒにゆきアルプ *Alps* を超え、再び瑞西に行き伊太利へ入らうと、ハイデルブルヒに在る、リライとの結婚の媒人であるマドモアゼル・デルフ *Mademoiselle Delf* を訪

問して、色々の経過を話すと、デルフは、來訪を喜びその近傍の、名高い人達へ紹介した。その中に森林監守の上役人、W家の家族中に、フリーデリイケに肖た娘があつて、氣に入つた。デルフはこの娘とゲエテと一緒にしようとして、色々勧めた。そこへ、ワイマル公からの迎への使者が、フランフルトから、こちらへ來り歓迎の手紙を持ち込んだ。そこで、デルフが留めようとするのをふり切つて、ワイマルへと志した。

詩人はデルフが留めた際、作りつゝあつた「エグモント」の語、「時の駿馬が、見難き精靈に、よつて、鞭打たれ、吾々の運命の軽い車<sup>かろ</sup>を急いで引く」と云ふやうなことを云ひつゝ、車に乗つたと、自傳に書いて居る。

## ワイマル入りと其地に於ける彼の生活、瑞西旅行

一千七百七十五年十一月七日二十六歳のゲエテはイルム *Ilme* の河岸の一小古市ワイマルに入つた。當時のワイマルは、日耳曼市の中に卓越したものでなかつた。何物も小さいスケールの上にあつた。公國の總面積はコルンオールのロウド *Rhode* 島の約半分位で、七年戦争の影響を受けて、一層財源豊でなく産業も漸く回復したといふ状態で、住民は凡そ六千、最も壯大なものとせられた公爵の宮城が、近く焼失したので、若公爵は、日耳曼アテネに、この小首都を變化しようとして企てた。然し公爵は年の若い間は、彼が好んだ人物を友人の如くに扱つて自らを樂んで居るといふ程度に止まつて、まだ事業に手を出さなかつた。彼が若い間は、彼の母アンナ・アマリア *Anna Amalia* 未亡人が代治者としてその氣轉と懇ろな性質とで一般の氣受よく支配した。この公爵夫人はブラウンシュワイヒ *Braunschweig* の王女一千七

百三十九年生れで、フリードリヒ大帝の女姪に當る。——五十六年に、ワイマル君主エルヌスト・アウグスト・コンスタンチン *Ernst August Constantin* に嫁ぎ——五十八年には既に早や未亡人になつたのである。この未亡人は彼の伯父である所の普王に似ず、日耳曼文學に興味を有ち特にその劇が好きであつた。それ故世襲太子の師傳に、獨逸文壇の名家キイランド *Wieland* (千七百三十三年生) をワイマルに招き寄せた。次のコンスタンチンの教育の爲めに、詩の好きなカルル・ルウドキヒ・フオン・クネエベル大尉を見付けた。ゲエテがワイマルに入つた時、三十六歳であつた公爵未亡人は、カルル・アウグストが即位してから、比較的、彼が愛好する智的な或は美術の趣味に自由に耽られることを喜んだ。ダムスタットの姫宮であつた新公爵夫人は、穩和な、因襲的な心の持ち主でありゲエテは天使と云つて賞讃するが、公爵とは、その性質に於て、調和しなかつた。

公爵は若いものだから血氣盛んで、旅行を欲し騎馬を好み、奢侈安逸に流れるこ



とを忌み總ての因順、特に、不自然窮屈なる宮中社會の形式墨守を蛇蝎視し、度々狩獵に出て又、夜間の森に陣營したり、田舎娘に戯れたり暴風雨と戦つたりする。然しながら又、純良な性質を持つて居り、苦しいことでも承諾したり、政治上の事に熱心であつたり、自分の偏見であることに氣が付けば改めるに吝でなかつた。官僚政治が嫌ひで、權力を民に割與するといふ方針を採つた。そして人才を集めたので、この小天地が、他を先導開發するに至つた。

公爵はゲエテに政府の評議會員の椅子を與へ、友人の待遇を以てワイマルに留めようとした。この發議は、首相、フォン、フリツチュ *VON FRIEDL* 及び有力な人達により反對せられた、ゲエテの如き、政治社會に無經驗である一詩人を、かゝる重役に登用することは規則を打破するものとして。而して頑強に反對を續け、かゝる先例無き任官が行はれるならば自分は辭職すると云ひ、ゲエテにしても、國を思ひ君を思ふならば辭すべきであると上書して決意を示した。公爵は彼の如き人材を刀

筆の吏より漸次高位に上さむとするは、愚であるとして斥けた。新參の一平民は勤勞多年の樞密評議員主座の大臣よりも重いのである。而してカルル・アウグストは、ゲエテを逃すは何よりも悲しいことであるので意志を醸さざることになし、フリツチュは公爵未亡人に、より表面上丁寧に慰撫せられて留つた。

——七十六年六月ゲエテは外務の秘密會議員の一人として評議員となり、(俸給は *Outlets*) 以來、四度重要な新任務を取つた。併、はじめの程は極めて樂であつた。何分、大國の中に介在してゐる小國故、度々脅威せられる、彼は外交策に、後年頗る意を用ひて活動してゐる。又、内治の上に就いても、文書その他の繁務を處理し又、實視を要する際は自分の役目の立場を確にすべく彼は領分内を巡回し、随分と面倒な業務をも避けなかつた。

彼は、婦人に好かれる男である。此の地に來てからも、公爵未亡人が彼を愛好し、この人ならば、我子を托して置いて、安心だと信用してしまひ、色々と文學上のこ

と、演劇のことなどに彼を尊重する。公爵は、フランクフルトで見た時から、その偉大にして、頼みになることを観破してゐるのであるから、賓客又は友人といふ禮を以て厚遇する。多年文學を以て、日耳曼に重きをなして居た先輩キイランドもこの自己より若きこと約十五年なる、エルテルの作者たる明敏有望な詩人をワイマルに於て、はじめて見た時から、彼を愛し、重んじ、クネエベルまた極度に讚美し、伯爵ギョルツも、悪くは云はない、樞密評議會首座大臣フォン・フリツチュにして、人氣に於て壓せられるといふ有様であり、侍従カルル・アレキサンデル・フォン・カルプ Karl Alexander von Kalb やヒルデブランド・フォン・アインジイデル Hildebrand von Einsiedel やフォン・ゼツケンドルフ von Seckendorf やその他宮中に入する名門或は藝術に卓越した人に至つてはゲエテの前には太陽の前のランプの如くであつたそれ故、宮中に職を奉ずる女、ワイマル交際社會の花と云はれる婦人達には、如何に、アポロに肖た、聰明その面に表はれて居る多藝多能にして、名聲高

き詩人を尊愛することが、自己の名譽の如くに感じられ、その人に接しないことがいかに光榮なきことに思はれたであらう。

上厩長シャルロット・フォン・シユタイン Charlotte von Stein 夫人や公爵夫人アマライ附宮女ルイイゼ・フォン・ゲオヒハウゼン Luise von Goechhausen や男爵夫人エミリイ・フォン・エルテルン・バイヒリンゲン Emilie von Werthern Beichlingen 公使館評議員未亡人の娘アマリア・コチエビユウ Annalie Kotzebue などのゲエテ熱は可なり高かつた。

ゲエテがワイマルに來ない前、チンメルマンの手許に在つたシャルロット・シユタインの影書を見て、三夜も眠らなかつたと云ふそのシユタインは厩長の細君で、學殖が深い。ゲエテが此の地に來た時、既に三十四歳でゲエテより六歳ばかり年長であり、既に三男四女を産んだことがあるのだけでも、ゲエテの心に此の女ほど、適したものは少く、彼の欲するものを、彼女の方に於て、云はざるに早くも悟つて、

それに適合する話、又は物を興へると云ふやうな特長があり、文學の愛好に厚く、又、哲學、宗教、政治と云つたやうに多方面に、相當の理解を有して居り、交際が巧みで、氷滑りも、唱歌も、喜々として、行ひ、媚を含んだ同情で絡ひつくやうに而も、卑しくなく、身體を容易に男に委しさうにもない。そして、話して居れば居るほど、引付けられるので、漸次熱烈に戀着するに至り、夫人もゲエテを一目見た時から世に稀なる人傑にして愛すべく憎み難き人だと思ひ、はじめは彼の戀を拒み、彼をして、ワイマルを去らんとまで思はしめたこともあつたが終にこれと通じ一日に二度も訪ね或期間の如き一つ軒下に起居し、互の愛着の情、火の如くに燃えた。

——八十四年に夫なる上厩長が、宮中の陪食を停止せられて、其妻に接近して居ることが多くなつたので、ゲエテは度々女と欲するまゝに相見ることが出来なくなつた。併し、この、才女の夫は、嫉妬もしないやうな、神經の弛緩した、唯、宮中で、陪食することに満足して、厩の方に失策の無いやうにと、心を配ることや、幾何か

資産を殖さうといふやうなことのみに考へて居て、平生、細君を敬愛してその細君が自己の好尚と合はず沈鬱になつてゐたのでゲエテとの交際で活氣を呼んだのを一面に喜んで居るといふ風な人であつたらしく想像せられる。

——七十六年の初め頃、公爵がゲエテに宗教事務監督に適する候補者を知らないかと尋ねたので、ゲエテは舊友、ヘルデルを推薦した。ヘルデルは、異端 *Heterodo* *my* であるとの風評が至つて高いので、田舎僧侶の反對に或影武者が加はるやうな事になつた。新公爵とゲエテに對する非難の聲もあつたが公爵は冬の中ばごろ、果斷を以て、ヘルデルを招聘した。

ゲエテが公爵の寵愛に乗じて、新空氣を、ワイマル政府に注入し、秩序を破壊するといふ風評が、ハムブルヒに居るクロプストツクの耳に入つた。此の人は、ゲエテの先輩で且日耳曼文學史上の大家で、其の著なるメツシアは小兒時代に妹と、ともに父に隠れて愛讀し、二人でその書中の對話を役者のするやうな聲色でやつて父

に聽かれたこともあつたのだが、成長するとともに漸次この人を敬愛することが減じてゐた。この人は、一千七百七十四年の十月の初め、五十歳の時フランクフルトに、二十五歳のゲエテを訪うて來たこともあつた。

クロプストツクが、——七十六年五月四日付の手紙で、忠告して來た。その手紙の文句中に、「最も親しいゲエテよ、此處に私の友情の證明がある。併しそれはそれを與へるのに幾分困難を感じるが、それでも與へなければならぬ。私が君の行爲に就いて説諭するのだとか、私が嚴く判斷するものとも思つて呉れるな。君には君の異なつた意見があるだらうから。併し君の意見と私のとは暫く問はず、君の現在の行爲が長く續くとしたら避くべからざる結果は、どうであらうか。公爵は彼が云ふやうに、丈夫にするのでなくつて反對に、さう飲み續けられたらば、身體を悪くしてしまはれるであらう。長生が覺束なからう。有力な體格の若い人々がそれで死んだ。日耳曼人は今日まで、彼等の主君が文學者を用ひて何一つするでもなかつたと云ふ

不平を抱いて居た。然るに公爵が例外のことをしたので皆喜んでゐるのだ。然るに公爵にして酒の爲めに他界せられたら、他の君主は何と辯護するであらう。公爵夫人は強く男のやうに知的である故、彼の苦痛をなほ靜めるであらうが、その苦痛が悲みに變ずるであらうよ。君はその悲みも抑制せられると思ふか。ルイイスの悲嘆！ゲエテよ！」といふ如き部分がある。そして又、「フライドリヒ・シュトルペルヒ Stolberg Friedrich に式部官としては、ワイマルへ行かないやうにと勸告するから、彼は、約束を果さないであらう、行つた所で、事態が改められないならば、直ぐ歸る筈だ、シュトルペルヒに手紙を出すよ、君はこの手紙を公爵に見せても、よろしい」といふ意味も書き添へてあつた。五月二十一日、ゲエテの復した手紙は簡單で、「將來あんな手紙は書かないで呉れたまへ、心地を悪くさせるだけで外に善いことは無い。君は僕に返事の仕様のないことを知つて呉れ。何故かと云へば、小學生のやうに、過失を白狀するか、詭辯的假托をするか、で無ければ、正直者として防禦する

かの三つの外どうともならない、多分、三つのものが混じたものが眞實を表はすだらう。所がそれは何の爲めになることになるのだ、それ故この事に就いては今後お互に何も云ふまい。私はあんな説論に返事をするやうな寸暇もない。あれは公爵を一寸苦しめた、それは書いた人が君であつたからだ、公爵は君を愛し尊敬せられる、私も同様であることを君は知る筈だ。左様なら、シュトルベルヒは、それでも來ると思ふ。吾々は決して悪くはなつてゐない、彼が吾々を見た時より善い筈だ」と。  
クロブストツクは直ちに答へた。他人の事件に、求められもしないのに混じ入るのは僕には大きな確な嫌なことであるのだ。それをしたのは僕の友情の證明とも云ふべきだ。それを誤解してあんなことを云ふのを見ると、君はその友情に價しない。シュトルベルヒが私の云ふことを聽くならば或は彼自身の良心に聽くならば行かない筈だと云ふやうなことを。これから二人の間の關係は斷絶して、シュトルベルヒもワイマルに來らず、再びクロブストツクも手紙を書かなかつた。

——七十六年の三月公爵が *Dresden* に行かうとしゲエテとワイマルを出たが、公爵は僕麻質斯で、大急ぎで歸つたので、ゲエテは、一人、ライプチヒに行き、カンネ *Kanne* 夫人と呼ばれる昔の戀女ケエトヘンに面會した。そして往年この地に在つた頃十四歳の小娘であつたコロナ・シュリヨオテル *Corona Schroeter* が立派に發達してゐるのを見たこの女とは一緒に演劇を試みたことさへあるので、この月また見てその美しさに打たれ、天使のやうだとか、あんな女を妻にしたいなどと思つた。そしてこの女優は、彼の周旋でワイマルに來て宮廷歌女となり、公爵から思を懸けられたが、ゲエテと深い交情を保つた。  
ゲエテはワイマルに歸つて、公爵の病床に度々近づいた。公爵は何とかして、詩人をワイマルに留めたいと思つた。ゲエテはこの頃まだこの地に長く居ようとは決心せずゐたのだ。公爵は先づ住居を與へる必要があるとして、ワイマルに住所を定め給へと切りに勧めた。その頃ゲエテは、ベルブエデル・アライ *Belvedere Allee*

の獵舎に居た乃で、ゲエテが、例へばあの公園内の園亭 Gartenhaus のやうなものが私の宅地に割與へてもらへれば氣儘に栽培がしてみたいといつた。この建物のある土地は既に他の人の物であつたのを公爵が、他の土地を以てその人に割り與へることにした、ゲエテは四月二十一日からそこに住んだ。僅に家僕又は料理人を雇つただけで閑素な生活をした。その家は實に人の目を喜ばすに足る位置に在つた、外觀は華々しくなくないが、ワイマルの羨まれる住居の一つで、イルム川がその前面の牧場を貫いて流れ市街は、遠く隔つては、居ないけれども、繁茂した樹木で、全く遮斷せられて、まことに静寂を極め、時々教會の時針の響きと、兵舎からの樂聲と、公園に於て美しい尾を擴げる孔雀の聲とによつて、僅に静かさが破られるのであつた。かやうな住心地のいゝ所故、ゲエテは非常にこの住居を愛した。軒は一つでも高く、總てが整頓して居り番人小屋だの犬小屋だの蜜蜂小屋だの射るに適當なやうに森の鳥のとまり木までもあつた。住んで心地よい場所故、公爵がまた一千七百八

十二年五月、フラウエンブラアン Frauenplan に家の贈物をしたまで、七年間こゝにをつた。而してこの住居を放棄し難いので、隠退所としてそれを所有し、好む人と静に會ふとか又は一人でありたい時に、こゝに足を向けた。そして、この住居に入ると、橋々に在る所の門扉のどれもに錠を卸すことが多かつた。キイランドが逢ひたくてもあへないと、不平を云つたのも無理はない。

この小庭園から植物の發達につき又自然科学の研究上、大に得る所があつた。そして又此處は戀をするのに最も適した場所であつた。美しい四阿や、ゆるやかな匂配、正面に立派な馬車道、四周に美しい牧場があり、公園の繁茂した樹木が包んだやうに聳えて居た。公爵又、時には公爵夫人も、此の簡素な家へ馬車を飛ばせて、こゝで食事することもあつた。公爵は、熱心にゲエテと文學談などを、ソファによつて試み、睡眠をたのしみなどして随分長く歸らないこともあつた。

而して、なほ戀する彼に幸福であつたのは、彼が十二年の長きに亘つて、愛した

シュタイン夫人の家が、この家を距ること二十分にして達し得べき所に在り、彼女の夫は——八十四年までは一週一回より多く家に居なかつたのである。加ふるに、兩家を繋ぐ一筋の細路は、美しく高き木や繁茂せる愛すべき花木などに塞かれむとするが如くであつたのだ。毎朝露に濡れた花をつける美しい花床を二人は、どんな眼をしてみたことか。机を中にして如何にスピノザの倫理、ラッファエルの骨相學などを語り合つたことか、毎年、美味な、實を累累と枝に結ぶ果樹園を、蝶と、ともに二人は、どんな心地で歩いたらうか。枝から枝に遊ぶ鳥が、小池へ石へ移つたり、蜂が、緑色や紅色や白色の花の中へ、もぐりこむのを、小亭の中から、どんなに二人は、膝をならべて見たことか。

これより前、四月のはじめに往年ストラスブルヒでやゝ、懇意にしてゐたそしてゲエテがストラスブルヒを立つた後、フリードリイケに戀慕した所の、ヤコツプ・レンツ Jakob Lenz がワイマルの公爵の許に来て、豪華な遊樂をした。そろ／＼浮

華でない實際的な生活に入らうと思ひ立つてゐるゲエテはこの道化の天才の出現を苦々しいことに思つた。

公爵は、多年衰微してゐるイルメナウ Ilmenau の採鑛事業を復活させたいとしてゐた。——七十六年五月ゲエテは、その方面に關する智識を早くも收めて、その事業に公爵が手を下さうとするや彼も鑛山を訪ねた鑄造所にも至り調査し以來、公爵の好參謀となり、それ／＼の道を付けた。ゲエテはその後、イルメナウに時々足を向けた。そして鑛山業を再び開始したのは——八十四年である。

建築の方にも忽ち彼は公爵の好參謀となり、その他、兵事、稅務何でも一切彼が隱に中心であつた。ワイマルに於てあらゆる方面に必要で又指揮者であると友人達が評したのは當つて居る。

政治に科學に戀愛に、忙しく活動を繼續し——七十六年に「兄妹」 Die Geschwister を書き、「井ルヘルム・マイステル修養時代 Wilhelm Meisters Lehrjahre に手を附

け、七十八年、「感傷」後に「感傷の勝利」Triumph der Empfindsamkeit と改題を作り翌年「エグモント」Egmont を續け、散文「イフイゲニイ」Iphigenia を書いた。

「兄妹」は——七十六年一月三十日新公爵夫人の誕生日に、ゲエテが、キルヘルムに、アマライイ・コチエビエウが、マリアンネに扮して、重要な場面を演じた。翌年の新公爵夫人誕生日には、喜劇「リラ」Lila を演じた。これは、同夫人の淑徳を賞したもので、——八十三年に作つた、詩「イルメナウ」は、公爵の仁徳の頌と見るべきものである。「兄妹」には、公爵夫妻の頌を含まない。妹のコルネリヤに對する愛情、シユタイン夫人に對する戀などを幾分取り入れたものらしい。

「兄妹」の、キルヘルムとマリアンネは、器用に描かれて居る。キルヘルムといふ男が、シャルロットといふ女を愛して居た。その女が最後に、娘の世話を、キルヘルムに托して死ぬる。キルヘルムは、その娘を、自分の妹として、本人にも知らせず愛して來た。ところが、その娘が年頃になると母親が生れかはつて來たやう

な氣持が起り、その娘に對して戀心を生じる。娘もまた兄に對して、愛から戀の情に移つてゆく。そして、平生、小説を讀んでゆくと、最も愛する作中の人物が、兄の顔になつてしまふ、そして又、うつくしくつて心立の善い、愛せられて居る女があると、それが自分のやうに思はれる、そしてそれらの二人が、いろ／＼の邪魔を切り抜けて、いざ結婚となると、兄妹だつたり、親戚であつたりして、その結婚が成就せられないと知ると、その本を焼いてしまひたいほど、腹を立てたりするのだ。このあまり裕福でない商人、キルヘルムが、フアブライツエといふ男を、信用して、家庭に出入を許す。この男は、彼に比して、資産を多く貯へて居る。キルヘルムは、此男から、金を借用する。然し、マリアンネの美貌に目をつけて居る貸主は、二三年、一度も、催促をしない。催促しないのが却つて苦しいが、返済するだけの金を用意して待つて居る。フアブライツエが今晚來て、夕飯と一緒に喰べる筈だといふので二三羽の鳩の毛を揉つて居た妹が、兄が呼んだと思つて來る。妹はあの方は歌



が巧妙だから習つてよといひ、また出て行かうとして、ついでに、ちよつと、キツスして行きませうと云ふと、鳩の料理がうまく出来たら *bonne nuit* に接吻してやらうと云ふ。娘は男兄弟なんて、どうして失禮なのだらう、あの人に接吻して上げたら踊り上つて喜ぶに違ひないそれなのに此のお爺さんは人が折角、させて上げやうと云ふのに、いやだなんて、鳩を眞黒まっくろに焼いてしまふから、いゝわよと云つて去る所がある。フアブリースエが来ると、借財を返す。そして何度もきかせた、シャルロットの話をしその戀手紙を讀んだりする。そして、妹が眞の妹でないことを、この親友に、打明けようとしてうちあけない。そして、外へ出て星を見てくると云つて出る。そのあとで、妻になつてくれといふ。所が兄さんとわかれるのはいやだといふ。同じ町に住んでゐて三人今までのやうにしたらいゝではないかと勧める。妹は兄の爲めに、下女の起きない先に朝、湯を沸せて兄の珈琲を用意したり、兄の靴下をしつくり足に合ふやうに編むのが、たのしみだ、わたしはあなたを愛するが兄以上に

愛し得るとは思へないといふ。然し、頻りに勧めるので兄が承知ならといふ。兄が歸つた時、妹は承知したから妻に呉れといふ。いやだと思ふが、妹が承知したと聽いて、失望して、俺の幸福を、一切持つてゆけ彼女は妹でなくつて、シャルロットの娘だと云ふ。フアブリースエの歸つたあとで、マリヤンネが、妾、あの人とは死んでも結婚しない、妾、結婚は一生しない、併し兄さんはするかも知れない、そしてたら妾もその人を愛しようと思すけれども、何となく不快でせうよ、妾ほど兄さんを愛する人は世界にありませんわと云ふ。フアブリースエが再び来ると、妹は、妾はあなたの申込を承諾したのではないと云ふ。フアブリースエは、到底、女が自分のものにならないとあきらめて来たのだから、兄と妹とを夫婦にしようとする。妹は眞の妹でないことをまだ知らない。キルヘルムが妹の頸に抱きつき、遂に私のものになる時が来たと接吻する。驚いて、この接吻は返していゝかわからないといふ。此の瞬間から兄ではない夫だシャルロットは、お前のお母さんだと云ふ。マリ



て可い。一行はフランクフルトで愉快に數日を過してから、ラインへ進んだ。ゼエ  
ゼンハイムに詩人は、ブリオンの家庭を訪ねた。フリーデリイケが兩親達とともに  
歓迎し、兩親は、前よりは若くなられたやうに見えるると云つた。ストラスブルヒに、  
リリイを訪ねると、彼女は既に母親になつてゐた。この女は非常に喜び、且つ讚へ  
た。彼は再び、ゴットハルト山に登り『まだ、然し死ぬ前には……』と獨言して伊  
太利を望み、引返した。公爵と詩人とはルチエルン Luzern から、チユウリヒに來  
り、ラワアテル Lavater に案内させて、そこらの美術品を賞し、シャツフハウゼン  
Schaffhausen を經、シュツトガルト Stuttgart に到り、ウエルテンベルヒ Wuertem-  
berg 公爵に歓迎せられ、同公爵の學校於て、學生、フリードリヒ・シルレル Friedrich  
Schiller を觀た。この學生こそ、後年、ゲエテと並稱せられる文豪である。

公爵とゲエテは、なほ、カルルスウエ、ダルムタットなどの宮庭を経て——八  
十年一月ツイマルに歸つた。

## 「エグモント」

「エグモント」Egmont は、フランクフルトで、書きはじめ、ワイマルで続けようとしたが、氣乗りがしないので、棄て、おいて——八十七年ロオマで完成したものであつて、ゲエテが、自傳中に、「ゲオツツ」と「エグモント」は、双生兒であるといふ云つて居るやうに、どちらも、強大なる壓制力に對して、自由の爲めに、戦つたものが主人公である。たゞ差違を挙げれば、ゲオツツは、進取的で、エグモントは、保守的であることだ。

ゲエテの書いた、エグモントは、正史の人物に強ち忠實に據らうとしないで、既婚者たる、彼を、この戯曲では、未婚者にしたやうに、わざとその状態を異にして居る。

西班牙王のフリーツプ二世は、新教を好まない。そして、自分の義姉、マルガレ

エテ・フォン・バルマ（カル、五世の女）をして攝政として居るニデルランデ（現時の和蘭、白耳義、北佛蘭西地方に當る）の人民に著しい教義上の壓迫を加へる。その壓迫が、猛烈でなければ、氣がすまないもので、攝政のマルガレエテは、此の上、嚴重にすれば、却つて騒亂を招くやうなものであると思はないでもないが、弟の要求が普通でないのでやゝ困惑を感じる。オラアニエン侯とエグモント伯とは、純粹のニデルランデ人であり特に後者は其性快活潔白無邪氣、尊大ぶらないで下層の人民とも親しみ、非常に人望があつた。此の二人は、蜂起する、ニデルランデの自由運動の煽動者と見做される。フリーツプの許に、アルヴァと云ふ公爵がある。これは、その性殘忍、王の権力に依つて、自己の官位を高めようとする狡猾な男である。王はこれに精兵二萬を授け、ニデルランデに赴き姉の從來の、緩漫なる方法を斥けて、暴力を以てしても、これを服従せしめよと云ふ。先見の明ある、キルヘルム・フォン・オラアニエンは、アルヴァが来る以上は、吾々兩人は、必ず安全で無い故、

自分は、ブリュッセルを立退く、貴公も一緒に、こゝを逃げて、身を安全の地におくことを考へよと勧めると、エグモン트는、観察を異にして居て、それに従はない、そして、アルヴァに面會するに及んで、堂々と心中に抱懐する意見を吐くアルヴァは、當初から、害心を挟んで居るのであるから、耳を傾くべくも無い。その場にこれを捕へて獄に繋ぎ、これを殺すのである。

今、それをなほ、くはしく書けば、第一幕第一場でブリュッセル市で、市民のゾオストやエツタや數人が、射的を試みて居る所に初まる。ポイク（エグモン트의部下の兵士）もそこに居る。一人が、ポイクの弓の射方は、エグメント伯その儘だと賞める。それから、ニデルランデでは誰一人、フィリップ二世の健康を祝して、祝盃を舉げるものは無い、世間一體は、聖クアンタン戰の勝利者、グラフエンリンゲ戰の奮闘者エグメント様萬歳だ、あの人を攝政にしてくれ、ばい、などと云ひ、新教の讚美歌を歌つてならないといふ理由が解らない、異端審問所などを設けて吾々

を壓迫するのだと不平を述べる。第二場、攝政マルガレエテは、フランデルス州に起つた騒動は、エグモン트의責任に歸すべきものである。外國の布教師に對し、嚴重なる調査を怠つたのにも、彼は心の底には、騒動の起ることを欣んで居るのだらうと、侍臣マキアヴェルに、エグモン트를呼寄せる命令書を書かせる。併し攝政は、エグメントよりオラニエン侯を、單純でないだけに手に餘る人物と睨んで居る。

第三場エグモン트는、クレエルヘンといふ町人の娘を、その家の前を通る時、見初めてから、その容色を愛し、互に戀に熱するやうになつて居る。この娘は、母と住んで居る。母は、エグメントと娘との戀を喜ばないでもないが位置の懸隔が不幸を生みはしないかと内心に憂ひて居り、娘がエグメントと戀しない前に、交の深かつた町人のブラツケンブルヒに添つたらどうか、エグメントさまに疵物にせられて棄てられるよりと氣を引いてみても、娘は、エグメント様の思はれ人が疵物だつて……

妻、夕暮にならなきやお出でないし知り乍ら、朝から、今か今かと、待つて居ますのなどと云ふ。ブラツケルブルとは、夕暮前に俺を追出して後へ忍び男を入れるのだと人が注意してくれたが、まさか、そんな事もあるまいと、疑ひ乍ら出てゆく。この戯曲には度々群衆が出て来る。第二幕第一場も町人の群が騒いで居る處へエグモントが現れる町人達が攝政に戴きたいといふ。

第二場、エグモントの所へ、オラニエンが来て、けふの攝政の態度を如何見たかと云ふ、エグモントが、攝政は女のことゝて、思ふやうにならないことがあると、直ぐ、此地を引拂ふなどと脅かされるが、いよくこゝを引拂はれたら、どこへ落付かれるのだ、引拂はれる以上は、弟御の所へゆかれるか、伊太利の親戚に寄食せられるより道はない。そんなことはなされるまいと答へる。オラニエンは否、今度こそは、攝政は、實行すると見た。王は又、われわれ大頭株を殺して人民を勞らうとするに違ひないのだと云ふ。エグモントは私共より忠義な臣下は無いのだから、そ

んなことは無からうと信じ込んで居る。オラニエンは、取調べもせず判決を下したり、判決を下す前に處刑したら如何するかと云ふ。エグモントは王はそんな不法をすることは無いと云ひ、既にアルヴァが迫りつゝあるのだから、各々自分の領地へ退いて堅固に構へたがよからうと勧誘しても、承引しないので、オラニエンは涙を拭きつゝ、君の生命は風前の燈火である。左様ならと退場する。

第三場、攝政の居城、攝政は弟は理窟などは耳を假さない何でも構はないで貴族でも町人でも百姓でも處分してしまふ、アルヴァ將軍に軍隊を授けて寄越すのだ遠い所に居る弟には妻の仁政は見えないで一揆などのことのみが映じるのだ。アルヴァが來たら無情と酷薄の二つとで又々人民を激昂させる。弟は妻を除物にしてアルヴァに實権を握らせる考へたと憤慨する。第二場は、クレエルヘンの住家で、母親が、ブラツケンブル様は、エグモント様とお前との戀仲を勘付いて居られる。併し、お前に氣がありや、ブラツケンブル様は、夫婦になる氣がお在りだ、年寄

の經驗を聴くものだぞといふと、娘は、エグモント様は、どうしても思ひ切れな  
いと云ふ。さうしてゐる處へ、エグモントが、入つて来て、夕飯の御馳走になりた  
いと云ふ。娘は、どうして、そんなに、今日は、冷淡にしてゐらつしやるの、まだ  
接吻一つも下さいませんか、どうしてまた、赤ん坊みたいに、腕を外套の中へ入れ  
て居らつしやるのと、あまへる、伯は、時によると云ふ、母は、あなた様がお見え  
になると此娘は、まるで夢中になつて何一つしませむ、妾、有合せ物でお食事をと  
退く。伯が外套を除くと、西班牙風の華麗な服を着てゐるので、娘はマーと驚いて、  
アラ、金羊毛勳章ねなど、云ふ、伯は情婦の愛らしい眼を接吻する。娘は喜んで、  
あなたを抱かせて下さい、お眼を眺めさせて下さい、慰籍も、希望も、悲哀も歡喜  
も其外、何も彼も、そこに見付かるのですとあまえる。

第五幕第一場は街上で、町民の口を假りて攝政はこつそり、ブリュッセルを立退  
く、アルヴァは来てから、二三人往來で話してゐても、直ぐ審問しないで國事犯に

したりすることを知らせる。第二場、アルヴァのクウレンブルヒの館では、彼の股  
肱の臣、シルヴァとゴメスとに、招待した諸侯が、客間へ通つた後、直ちにエグモ  
ントの秘書を捕へよと命令を下す、アルヴァの子にフェルデインアントと云ふ少年が  
ある。この子は、エグモントを、理想的人物としてゐるのである。今日エグモント  
様に遇つたら、今日、行くと云つて居られた。あの人は、私の一番好きな人だと云  
ふ。エグモントはアルヴァの意見に對して自己の所信を吐いて、王の目的が善いの  
だとすれば、それを指導する人がその道を誤つて居るなど、云ふ。アルヴァがお互  
の意見は到底一致しさにない。貴殿は王を輕蔑し、議官を侮るのだと云ふ。エグ  
モントは、我々の首を請求したまへ、それで何もかも落着を見るであらう、此の首  
の骨が軛の爲に曲らうと、斧の前に屈まうと、高貴な精神は平氣で居よう、あゝ無  
益の辯で、空氣を振蕩させた外何にも得る所は無かつたけふ不參の諸侯もあるから  
他日列席せられたら、一致點を見出し得ないとも限るまいが……と云ふと、アルヴァ

ア命じて、帶劍を取上げる。王の命令です。貴殿は拙者の捕虜ですと云ふとエグモントは劍を渡しつゝ、此の劍は、我が胸よりも王事を守つたことが多かつたのぢやと云ふ。

第五幕第五場は、街上でエグモントの獄に投せられて、その生命が危いと聞いた可憐な戀女クレエルヘンが、街道に出て、仁徳深いあのエグモント様を、早く救出したい。皆様力を合せて救出して下さいと群衆に訴へる。群衆は蹶起してその事に當りさうにない。ブラツケンブルヒは彼女を彼女の家につれ歸る。第二場は牢獄の中でエグモントの獨白、第三場クレエルヘンの家、死を覺悟した所の彼女は、ブラツケンブルヒに、いつか、あなたが早まつて自殺しようとした時、妾が、奪ひ取つた毒藥の小瓶が、此處に在る、これで妾は死にます。死ねば、何もかも一つになつて、エグモントさんと妾と一つになれます。お止めなさんなと云ふ。男が私も共に死ぬと云ふ、いやあなたは、生き長らへて母の世話をして下さい、妾はあなたを兄

さんと呼びます、兄さん、母上を頼むと云ふ。貴女あつての私だと云ふのを聞き乍ら、毒を飲む、男は出てゆく。

第四場牢屋、アルヴァが来て、「……汝は國事犯人なり、故に宣告す、汝は翌曉、獄舎より市場に引出され、凡ての謀叛人に對する警告として群衆の前に於て斬罪に處す」と宣告文を讀んで去る。そのあとに、フェルデインナントが残り、子供の希望の標的は青年であり青年のそれは大人である。僕の前に常に居られたのはエグモント様あなたでした。と云ふ。エグモントは、俺を殺さうとするのは、王の意志でなく、君の父の意志だから、俺と共に逃げよと云ふと、それを考へないでもなかつたが、どの道も塞つて居て施す術がないと云ふ。フェルデインナントを去らしめた後、じつと眠ると、夢に、クレエルヘンの相貌をした自由の女神が現れ、汝の死は諸州の自由恢復を暗示する汝は勝利者であると月桂冠を渡す。その時、太鼓、笛などの響來り、夢から覺める。彼は、自分は自由の爲めに生き、戦ひ、犠牲となるのぢや



と云ふ。これで終りになつて居る。

此の戯曲にもシエクスピア Shakespeare の影響が見られる。シルレルは、この戯曲を賞讃したがエグモン트가歴史的人格を備へないのを憾みとすると云つた。ゲエテはエグモントを事業家とせず人道主義者として書いたのには、思ふ所があつてさうしたのだと察するに難くない。

「タウリスに於けるイフイゲニエ」

「タウリスに於けるイフイゲニエ」Iphigenie auf Tauris は、ゲエテが愛讀する希臘の神話に、材を採つたもので、一千七百七十九年先づ散文に作られ、その年ワイマル劇場で興行せられゲエテはオレストに扮して舞臺に上つた。

希臘が、アガメンノンを大將となし、戦艦一千百八十六隻舳艫相啣んで、トロイを征しようとする。希臘軍の、出發に當つて逆手の風が起つて、船出が難かしい。これは、どうしたことかと云ふに、大將のアガメンノンが、過つて、ヂアナ神（ヂュピター神の寵愛を受けた少女リートオが双兒を産んだ。その一人は男でアポロで一人は女であつた。これが、森林と狩獵とを司配する神ヂアナである）の愛して居る鹿しかを殺したので、この神の憤怒の致す所と云ふことが解つた。そこで、この神の怒を宥めるには、アガメンノンの愛娘、イフイゲニエを犠牲に供したらよからうと

云ふことになつた。姫は、犠牲になるのだと知り、一時は悲んだが、自分がそれに甘んずれば、希臘一國の幸福になるのだと思ひ、けなげにも深くそれに進んでならうといふ。祭壇に於て、一刀の下に首が落ちたかと思ふと、不思議にも、姫はそこに影も見えないで、鹿が死んでゐた。これは、デアナ神が、この少女の心根をあれと思ひ、所謂神隠しを行つたのであつた。

姫は黒海に臨んだトアス王の領土タウリスの濱邊のデアナ神の齋いっさの尼となつて居る。そしてこの土地では、他國人が來たら、引捕へて人身御供にする筈で、それをこの美しい尼が司つて居る。トアスが、尼の容色を愛して、尼が私の血縁には同族相殺すといふ恐ろしい運命があるのだから應じられないと、拒んでも拒んでも、あきらめずに挑みかゝる。すると、二人の他國人がその國へ來た。その一人は、イフイゲニエの弟のオレステスであつて母を殺して、出奔し、ストロフイオス王の子ピラデスに身を寄せた。その二人がこゝに來たのだ。オレステスは、悲觀してアポル

ロンに祈つたら、タウリスを司るあの神の共腹のデアナの社で救つてやる。仰せられたのは、苦難と共に命を消滅するとの神意であつたのが解つたといふ。ピラデスはさうでないアポルロンのお告の中に、歸國の便が備へてあるといはれたではないか、我々はデアス神をアポロ神の所へお連れ申せばいゝのだといふ。尼がピラデスからトロヤが落ちたと聞き、オレステスに、熱心にアガムノンアガメムノンは、自國の邸に歸ると妃と姦夫とに殺されたのは事實かとさき、姉と知らずに、オレステスは、その妃を自分が殺したことを話す、尼は自分が姉であると云ふや、心の狂つてゐる弟は妙なことをいふので、デアナに祈るとそれが治る。それから、尼は、犠牲にすべき外國人に血の穢かあつた故、デアナ神像を清めるといつて海岸へ持ち出すとそこから舟に乗せて尼を連れかへらうと云ふ手筈にする。王が兵を以て逃がすまじとして争が起る。そして王がデアナの神像を持運ぶことを許さない。主張す。オレステスが、「あゝ、御像のことなら争ひますまい、私をはじめ神の御助けを願つた時、タウ

リスの濱邊の社に、さびしう暮してゐる同胞を、ギリシヤに連れ歸つたらば呪はれから救つてやらうといはれたのを、アポロンの同胞ヂアナ神とばかり思つて居たが、これは私の姉上のことでござつたわい」といふやうなことをいふ。それにつれてイフイゲニエが、「このやうな貴い御慈悲を遊ばす折は又とは容易に見られますまい」と懇ろに頼むそこでトアスが「それなら、お歸り」といふことになるのだ。この戯曲を評してシルレルは、これは驚くべきドラマチックボエム劇詩であつて又、人間界の喜悅と驚異を永久に残すべき驚くべき製作物であると賞讃して居る。

今、順序を追うて、梗概を述べると、「タウリスに於けるイフイゲニエ」の最初の場面は、美しいイフイゲニエが、タウリスの濱邊のヂアナ社前の森に於て、海を見て、感慨を漏らす所にはじまる。神の守護を感謝しないではないそれを頼みに思はないでもないが、國が戀しい、眷族が戀しい、どんなに、こゝでギリシヤの國を、あこがれても、波の聲が聞えるだけで、愛の絆で結びあつた同胞の睦じさから、こ

んなに隔離せられて、ほんとうに寂しい、もし男であつたなら、戦争に出て、名譽の死をも遂げように、トアス王は、妾を、重い鎖で縛りつけて居る。あゝ自由が欲しい、かつて妾を死から、お救ひ下さいました女神よ、どうぞこのさびしい二度目の死ともいふべき生活からお救ひ下さいましたと述懐する。第二場王トアスの使者アルカスが來て、勝いくさを報じ、王がヂアナ神へ、感謝の意を表しにお見えになると告げ、なほ、多くの人々が尊び敬ふ、あなたの美しい眼に、くもりがあるのは、胸に隠して居られる悲しみがあるに相違無い、それを私共に漏らして下さいと望んでも、かなへては下さらないと云ふ。イフエゲニエが、流罪人や、孤子のやうに――と云ふ、貴女はそんなお量見であられるかと問ふと、この土地がどうして、生れた土地に代へられませうぞ、運命が、親や同胞から、妾を裂いてこゝに救はれては居るものゝ、妾には再び生活の新しい喜ばしい花は咲かぬと嘆く、そんなに不幸だと嘆かれるやうでは、王の親切をも、心から感謝せられるのでなからう、此の濱邊

に上つた他國人は誰でも、この神の社で血祭にせられるのが例であるのに、王は、  
尼君を、いたはつて御座るにと、アルカスが云へば、生きて居るとは云ひ乍ら、リ  
イツイイ Letho の川岸に自分を忘れて居ると云ふ日を數へて待つ墓所をさまよふ人  
魂みたやうなこの生き乍らの若死に何の喜びがありませうと託つ、アルカスが、あ  
なたが來られた最初の日から、王はあなたの言葉を容れ、異國人を助けてその本土  
へ歸し、仁徳を施され、デアナ神も亦それをお憤りが無い、そんなに功績を示され  
てゐまするのに、何とも思はれないかと云ふ。自分のそんな仕事が物の數になりま  
せうや、自分の功勞を數へたてるやうな者が何になりませうと云ふ、アルカスは、  
王が來たら話に調子を合せて呉れ、さうでないといふ尼君の御利益にならぬ、さうして、  
王の御所存に従はれよ、素性をもうちあけられますやうにと云ふ。いや、王が妾  
の身體を自由にせうとなさるなら、デアナ神に、妾をお守りあるやう祈りませうと  
云へば、今度は、あの年を召した、短氣な王様、どうやら、思ひをかなへないでは

置かぬ御決心のやうだと云ふ。第三場王が現はれて、わが子の敵を打つて、凱陣し  
て見ると、家の内が荒野のやうで困る、ついては、けふは、お前をつれかへつて新  
嫁にする覺悟ぢやと云ひ、素性を明せよと云ふ、素性は明されない、妾は呪はれた  
女でございますと云ふ、いや構はない、云へ、そして歸國の目宛てがあるなら、そ  
のやうにもして斷念もしよう、まつたそれがないならば、妻に迎へて差支はない筈  
と迫る。イフイゲニエが、妾はタンタルスの血筋のものでございますと云ひ、先祖  
の間に起つた、密通の事、子に親を殺させようとしたこと、子供を殺してその父に  
食はせたことなどを語り、自分の父が、アガメムノンで、クリテムネストラの腹か  
ら、自分が産れ、その後、エレクトラが産れ、又男の子、オレストが産れたが、  
トロヤを攻めようと、ギリシヤの軍勢を統率して、父、アガメムノンが、海に乗り  
出さうとすると、デアナの神が、父に怨を抱いて、船出を妨げられたので、神占に  
よつて、その憤を静める爲め、妾が生命を女神に献げることになつた時、女神が、

おはれと思召されて、雲の上に抱き上げてこゝにお伴れなされたのですと述べる。それと聴いても王は、情慾を満さうとする。尼が拒む。王は憤つて、この頃、民が、責めることは、女神への献げ者、異國人を血祭にしないから、子が殺されたのだと云ふ、私は、お前の願ひを容れて、それを怠つたのが悪かつたと云ふ。イフイゲニエは、そんな血を女神は望まれない筈と云ふ。王は聴き容れず、海岸で捕へた二人の異國者を、追付け、こゝで殺して女神に献じよう云ふ。第四場はイフイゲニエの神への祈り詞。

第二幕第一場、この海岸で王に捉へられた、オレストとピラデスが出る。オレストが悲觀して、アポロ神に、救ひを願つたら、タウリスに在る、同胞のデアナ（アポロとデアナ女神とは、デユピターとリトオとの間の双兒）の社で救助を與へると仰せられたが、そのお告げの意味は、苦難と共に身を亡ぼして遣るとの思召しであつたのだと悟つた。自分の運命は、因縁から逃げられないのだとあきらめるが、お

前を一緒に死なすのに忍びないと嘆ず、ピラデスは、悲觀すな、神のお告げを信じ、て居よと慰める。ピラデスは又オレストに、若いに似合はぬ大きい仕事をした丈夫だといふ其れに對して俺は母親殺しの下手人だ、タンタルスの呪はれたる一人だと萎れる、ピラデスは、君は、この土地からアポロの同胞デアナ女神を、お伴れ申せと勧める。そして、ひそかにきけば、此の社に、神々しい他國から來た婦人が居て、血なまぐさい供物をば、とめて居ると云ふことだと慰める。残忍な王が俺達を殺さうとして居るのに、女が頼みになるものかとオレストが云へば、いや、女だから頼みになると云ふ。第二場イフイゲニエが現れて、あなたはギリシヤ人のやうに見えると云ひ、足の鎖を解くと、ピラデスが、何といふ美しい國言葉を聞くことだ、どうぞ貴女の貴い素性をうちあけて下さいと云ひ、私共はアドラストの子息で伴ひものは長男私は末の子、父はトロヤを落して歸つた後死に果て、三人の子が領地争ひをして、長兄が中兄を殺した、私は長兄の味方であつたと云ふ。トロヤが落ちた

ときいて尼が顔色を變へる、そして、戦争の話をしてくれと云ふ。ピラデスが、クリテムネストラ(尼の母)がエギストと志を一にして夫を殺したと語ると尼は、氣を取亂してみえる、ピラデスは、王が、姫のイフイゲニエをデアナ神に献げたのを夫人が怨んでエギストに許したのだと物語る。

第三幕第一場、オレストとイフイゲニエと相對した時、尼は、自分が尼である以上は、あなたを血祭にはさせないが、王の希望を斥けたらば、外の女が、いつきの尼になりませう、その時はお生命が氣遣はれると云ふ。そして、その呪はれた一家の愛らしい男の子オレストはどうになりました、エレクトラも無事であるかと問ふと、二人とも生存して居りますぞと答ふ。あゝ嬉しや、と、飛び上るやうにするので、まだ悲しいことがありますわいとオレストは、父の王の殺されたその日、エレクトラが、弟を救ひ出し、父の外舅に預けた。外舅は、自分の子のピラデスとオレストを一緒に育てた。この二人は大變懇ろになり、復讐しようと、クリテムネストラの

所に到り、エレクトラに一層煽りたてられて、つひに母を殺したが、それ以來、悩みにせめられて居ると云ふと、兄を殺したと聞くあなたの悩みと、エレクトラの悩みとは似たものでありますなと尼がいふ。あなたの前に何を隠さう、私こそそのオレストだと云ひ放つ、それから、あなたには、エレクトラ以外姉は無かつたかと尋ねると、ありはあつたがその姉君は恐ろしい運命で、なくなつてしまはれたといふ。それから、たとへ母上の血煙から凄い恐ろしい聲が現はれて、そなたを地獄へ落さうとしても、その姉の真心からの祈りには、オリンブからお助けがあらうとはそなたは思はないかと云ふ、その一言に驚いて、そもそも、あなたは誰ですかと尋ねると、知れさうなもの、オレストよ、妾は、あなたの姉、イフイゲニエが解らぬか、この姉が、イフイゲニエがと叫ぶと、ヤ、姉さま、おゝ弟と云ふ。然し、オレストは、忽ち、疑ふ、姉が説明する。それぢや、二人を、こゝで殺さうと云ふ神の思召しぢや、サア一緒に死なうと云ふ。第二第三場、オレスト狂亂して、尼や、ピラデスを

見て亡霊だと思ふ。

第四幕第一場は、ピラデスと弟とが、舟を用意して、いざといふ合圖をするのを待つて居るイフイゲニエが、一人現れて、王から犠牲を早く神壇に献せよと云つて來たら、かやうく答へよと教へられたが、妾は子供のやうに、二人の云ひつけを守らねばならないか知ら、今まで、嘘を言つたことの無い妾には、それが云ひ苦しいと考へて居る所にはじまる。第二場アルカスが軍兵をつれて來て、早く二人を犠牲にせよと王からの勸めだと云ふ、尼は、年上の方は同胞殺しの罪人なる上に、お社の内殿で狂氣した故、御奥が穢された。されば、妾は海邊へ出て、女神の御像を洗ひまつり、清めの式を行ひまする、誰も、その式場へは近寄ることはなりませぬと云ふ、アルカスが、王の許可を得て後にせよと云ひ、王の希望通り、王に身體を任せたら、二人の他國者も救はれると勸める。第三場イフイゲニエ獨白。第四場、アルカスの去つたあと、ピラデスが來てオレストの狂亂が静まり本復したと告げ、

風は都合よく吹く上に、一時、別れて居た同船の者も見付かつたと云ふ、尼は喜びの内にも、王を欺くことを恐れる。微塵も心に穢れの無いのが、妾の心願だと云ふ。ピラデスは、正直にも程がある。兄弟や、われ々の生命の爲めに一言の嘘は云つてもよからう、兎に角、濱へ引き返し、使者がきて、王の所へ伺ひに歸つたことを物語り、再び來て草のかげで、合圖を待たうと去る。第五場イフイゲニエの嘆き。

第五幕第一場では、アルカスが王に向ひ、尼君の、人身御供を、延されるのも怪しい、何でも、二人の乗つて居た船も入江に隠してあると聞けば、油断がならぬと云へば、トアス王は、嚴重に探索せよと命じる。第二場、トアス獨白、尼を、やさしくすれば、よいことにして、勝手なことを企み居ると憤慨する。第三場、王が尼の前に出る。イフイゲニエは、人身御供を早くせよといふ王の意志は邪念が支配して居るのだと叫ぶ、そして終に、あの二人の年上の方は妾の弟オレスト、今一人はピラデス、弟はアポロ神のお告げにより、こゝからデアナ神の御像をお伴れするそ

の手柄によつて母殺しの呪から許されることになつて居ます、サア王様、お心次第で、残されたタンタルスの二人をお殺しなさいまし、お殺しになるならば、どうぞ眞先きに妾を、でなければ、妾の口から漏らした爲め、あの人達が殺されるのを、見ることに耐へられませぬと訴へる。王は、あの奴等が、和女を欺したのだらうと云ふ。いや／＼そんなことはありませぬ、王様には兼々、素性がわかつたら、本國へ歸すと仰せられた、今その時が來ました、どうぞ尊いお恵みをお授け下さいましと迫る。第四場、オレストは、劍をふりつゝ、ものども、船まで、姉君と俺の逃れるやうに敵を斥けて、道を開いておけと云ひ、王と姉の所へ駆け來る。姉は弟を制して、尊い女神の御殿で、刃物を揮つてはならぬと云ふ、オレストは姉にこの者は何かと王を指すと、妾の二度の父君、タウリス王、無禮をしてはなりませんぞ、妾は、妾等の計略を一切、王に打明けましたと告げる。第五場、ピラデスとアルカスと登場、王はアルカスを一時退場させる。オレストも評議がすむまでピラデスに衆

を纏めてあちらで待つて居てくれと退場させる。第六場、王は、オレストに、イフイゲニエの弟にして、アガメムノンの實子だと云ふ證據を見せよと云ふ、オレストは、アガメムノンがトロヤ人を斬つた劍を示して、國中第一の強者を出して、勝負をさせて見よ、武道の作法だと云ふ。そんなことはこの地ではしないと云ふ。オレストはそれなら、王自ら、新しい習ひを作られよ、この地へ漂泊する他國人に代つて戦はう。私が負けたら、一切の今後の異國人の負け、勝つたら、今後、虐待しないでもらひたいと云ふと、如何にもあつぱれ豪勇の血系の者と見える。それでは自分が眞劍の相手をしようかと云ふ、それを見て、尼が止める。妾とて、よく／＼知り極めないで、一緒に逃げようとする筈がない、弟の右の手の星の形をした痣と云ひ、エレクトラが抱いて居た際落して、傷をさせた眉の所の跡、父君に似た顔のさま、弟に違ひありませぬと云ふ、王は、いかにもそれで弟御とは解つたが、仲直りはできさない、劍で勝負を決めねばならぬ、何となれば、女神の像をギリシヤへ奪つて行



かうとするのを、許して置かれるものでないと云ふ。オレストは、女神の像なら、争ひませぬ、今、氣が附きました。それは私が、お祈りした時のお告げに、タウリスの濱邊の社に籠つて居る同胞を、ギリシヤへ伴れ歸つたら、呪ひから救はれるぞと仰せられたその同胞とは、姉上をさゝれたものであつたのだ。願はくば王様、心を和らげたまひ、姉上をギリシヤに歸して下さい。私共の力と詭計は、崇高な姉君の靈の光に負けてしまひました。こんな純な、願ひを大丈夫の、貴下が、よも、無下に斥けはなさるまいと云ふのに、言葉を添へて、イフイゲニエが、前々のお約束のお言葉通りに、慈悲を姉弟の上に垂れたまへと懇願すると、玉が遂に許す。これで終つて居る、

この、イフイゲニエは、まことに、神々しく、美しく、天才の筆によつて活躍して居る。この一篇の如き、ゲエテの作物中優れたものゝ一つである。

### 自然科学と彼の人生觀

ゲエテが、八面に眼を向ける人であつたことは、彼の著述の内容を検する時、誰でもそれを否定し難い。礦物學、地質學、動物學、植物學、理學、化學、氣象學と廣く興味を以て、常に飽かず、研究すればするほど愉快で耐らないと云ふ様子であつた。

彼はライプチヒに在つた頃、法科生でありながら、醫學に通じた宮廷評議官ルツドキヒ Ludwig 家で、醫學生と午餐を共に喰べて、それらの人達と交り、キンクレル Winckler 教授の電氣學を熱心に聴講し、病氣で、フランクフルトに歸つた時には、クレテンベルヒ Kletenberg と醫者のメッツ Metz とから、鍊金術を習ひ、試験室まで造つて熱心に試みビヨルハアエ Boerhave の化學入門から化學に就いて教へられる所も少くなかつた。

病氣が治つて、ストラスブルヒに赴いてからも法律書ばかり繕いて居るのではなくつて、馬で旅行をして、ザアルブリュッケン Saarbruecken では市長に乞ひ、硝子製造所、明礬製造所、石炭坑などを見せてもらひ喜んでゐる、ベエレンタアル Baerenthal でも、石炭坑、製鐵所などを視てゐる。大學では化學の大家スピイルマン Spielmann 解剖學の大家ロオプシュタイン Lobstein の講義を聴き、エエルマン Ehrmann の臨床講義にも出席して居り、建築に關する方面にも眼を張つた。エッツラ Wetzlar から歸つて辯護業に従事して居た頃に「骨相學」の著者ラワアテル Lavater が來訪して知己となり、その方面の趣味をも進んで取つた。

ワイマルに來てからは、自己の庭園に諸種の花を植え、又諸方より材料を集めリ、リンネ (又は Linnæus) 書物によりて研究したがリンネの植物の種類は一定にして不變であるとの説に疑を抱き、植物は周圍の氣候などにより變種を來すことを明にした。又イルメナウ鑛山業再興に就いて鑛物學、地質學を學び、エナ Jena 大

學の自然科學教師と交を結び、山林と農作とに關する事務から植物學攻究に便宜を得て、得る處も多かつた。

ハルツや、シユワイツの旅行が、鑛物學、地質學に關していよいよ研究熱を煽つた。一千七百八十一年エナ大學で、ロオデル Loder と、解剖に就て研究してゐる時、彌猴の左右上顎の間に間顎骨があるが、人間には無ひ、この點で人と獸との區別が劃せられると聽き疑を抱き、以來、その點を調べて人間にも、それが有ることを知り、一論文を作つた。

伊太利の珍奇なる植物と、建築物と海の動物とが彼を喜ばせた。又、その地に於て羊の頭骨を拾ひ、それから研究して頭蓋骨は脊椎の變化なりといふ説を爲した。伊太利より歸つてからも興味上、鑛山視察をば辭しない。又、彼は、光線について色彩について攻究し、一千七百九十年にはシユレジエンの陣中に悠々と光學を研究してゐた。かゝる熱心は、彼をしてニユウトン Newton の色彩論に對し反駁文を草

するに至らしめた。

彼が二十年間攻究實驗の結果である所の「光彩論」*Zur Farbenlehre* は一千八百六  
年に印刷を始め十年五月に完了した。

一千七百九十二年又、戦地に在つても、陣地を歩き廻りつゝ、光線研究をしてゐた  
といふことだ。エナに於ては、植物學者バツチエ *Batsch* 醫學者、フウフェランド  
*Hufeland* 解剖學者ロオデル等と交り、——九十六年には、星學研究、昆蟲研究、陰  
花植物、の研究に耽り、その後又數年、視學、聽學の攻究を怠らなかつた。光彩論  
を出して後も、自然科學研鑽を怠らず。——タウヌス *Taunus* で地質を調査したこ  
ともある。彼の努力は、一千八百十七年から——二十三年まで特に著しく「自然科  
學特に形態學論」*Zur Natur-Wissenschaft überhaupt besonders Zur Morphologie* とな  
つて花咲いた。

氣象學については、前年から、注意してゐたがリューク、ホワルド *Luke Howard*

の、卷雲、不齊の積雲、薄層雲、雨雲といふ如く雲の差違に名稱を附せんとしたこ  
とに大變興味を有ち、一千八百十六年に於て早くも彼はそれら雲の形がそれが在る  
高さに於て異なることを觀破し。引力と空氣の密度とに就て調査しそれが晴雨計に  
及ぼす影響などを大分精細に調べて、彼獨特の氣象上の説を成した。

ゲエテほど經驗を生かした人物は少ない。經驗を超越した形而上の世界は彼には  
宗教の領域であつた。彼の性質は抽象的空論を好まなかつた。従て專斷的空論に立  
脚して言ふ事の危險に冒されない物の云ひ表し方を取らうとした。彼は最初神を信  
じ、後暫く神を疑ひ又、神を信じ、人生觀を立てた。而して彼はその智能を以て萬  
象に對し、その表裏を觀察し、これを評し、之を樂んだ。神と人間との、結合を觀た  
彼は自然科學の奴隸で無く又、盲目的に所謂神の命てふものに従はずに眞の神に觸  
れた。彼は神話などに材を採つて戯曲を書いたが、その人物には自分又は自分の周  
圍の人を持つて來て居る。彼は經驗を重んずることに於て多くを人に譲らない。隨

つて彼の書いたもの、中に出て来る格言は、彼の意見として注目すべきもので在る。彼の固執し連続した理論には、自然科学を學んだことからの因縁が預つて大きい。彼はスピノザ (1632—77) を愛讀した。スピノザは、彼と同様に世界及び一切有が唯一にして神的なりと云ふ意見即ち萬有一體論を有つて居たので、「神は自然に在り、自然は神に在る」God is in Nature and Nature in God と云ふ意見を持つて居る。彼が、彼の書物を讀んで、その一致に、微笑したのも怪しむに足らず爾來、又、彼の書を愛讀して飽かなかつた。

彼は幼年時代から、母に教へられて、聖書を愛讀した。そして、神の世界の如何に完全なかを思つた。所が、リッサボンの地震で、多數の人民が忽ちにして死果てたことを聞いて、神の意志の、今まで考へて居た如くに公平無私にして完全なものであるか如何をば疑ひはじめた。然し、後年、フランクフルトに病んだ時、神秘主義を奉じて居る、クレテンベルヒの感化を受けて、神の力の廣大なるを思ひ、終に

萬有神論パンテイズムの信者になつた。

既に萬有に神の顯現を認められた彼は、物總て破滅の期無しと思ひ、一切有が唯一と觀たるを以て自然即自我であるとし、萬有は神の實體に必然屬すべきものなれば、人は自分で、周圍を征服するやうに思つて居ても、その實、目に見えない力に動かされて居るのだと信じてゐる。されば、吾人に目的の窮極と云ふものは無い。吾人は、生活を肯定して行けば善い。宇宙は一の例外もなく脈搏によつて運営せられ、リズムによつて支配せられ、生命の流によつて漲つて居るのだ、死の如き一時的假現で、あるとし、罪惡なるものも、善への發展に於ける幼弱に外ならない、善と同等の權力を有する惡は絶対に無いとするのだ。されば彼はカントの根本惡説に反對した。同時に、彼は基督を愛するけれども、人間は誰でも本來邪惡の罪を背負つて生れ來つたのだと、人間の自然を壓迫する基督教の方法に對しては不平を抱いた。彼は、人間性を尊んだ。人間性の爲めに、古い因襲と戦ひ、希臘主義と接近した。

反自然が彼の敵であり、健全が願ひであり望みであつた。健全を望み、頑固不健全なる道徳を奉じて、それが、神の意に適ふと信じてゐるものに對して感笑し時には嘲笑して、積極主義を叫び且つ實行した。その點で、アンチ・モラリストである。然し、積極主義は、放埒に流れる弊がある、乃で彼は自己の制限を主張した。これを彼が彼自身の肉慾などをして調和に居らしめ健全に在らしめた。同時に神と自然とに對する愛によつて働き、自個を擴充し偉大にせんとした。彼の眼には、根底から、憎くつて耐らないものは一つも無い。何物にも神を觀る。随つて、何んなものでも、價値の無いものは絶對にない。こゝに於て、彼は經驗を殺さない。エマアソン Emerson が、彼ほど、健全で時勢と世間とを愛し、調和を保ち、氣安く人生を樂んだものは無い。そして世界の造物主は、何人よりも多く彼に秘密を開いた。彼の思索には快活な自由が付いて居る。この人から吾々は精進勇猛を學ばねばならぬ」と云つたのは、よくゲエテを觀たものと評すべきだ。

ゲエテが哲人は憎惡、悲愁などを排斥し善を行ふことを樂しむべきだといひ、人に寛容であつたのをメルクが、「限ない放任」などと刺笑したと云ふことだが、彼は、その當時の社會的習慣などより超脱して、廣大な境地に俯仰して居たのだ。

## 伊太利旅行

ゲエテは熱心に公爵を助けて政治を行つた。一千七百八十二年には、フラウエン  
ブラアンに園亭<sup>ガーデンハウス</sup>から移つた。内院首座の椅子を占めて居て、その事務が多忙であ  
つても、鑛物學、地質學、解剖學が忘れられない。それ故——八十四年には人間に  
間頸骨の在ることを發見してカムベル Comper などの説を見事破つた。

その前——八十一年には、『ダス・ノイエステ・フォン・ブルンデルスワアイレルン』  
Das Neueste von plundersweilern を著した。

公爵が、思を懸けた、コロナ・シュリヨオテルは、若い公爵よりも年長のゲエテ  
と懇意になつた。——八十三年には公爵に男子が産れた。この年八十年に書き初め  
た「エルペノル」Elpenor は中途で筆を投げた。

普魯西と埃太利との勢力争に當り諸侯は、孰れに屬すべきかに迷つてゐるので、

ゲエテは諸侯聯合の策を講じた。——八十六年には、外交問題が一先づ落着いたの  
で、伊太利に遊び多年の宿願を果さうとワイマルを出た。

一千七百八十六年八月二十八日は、彼の誕生日に當るので、カルルスバアドの友  
人達が盛んに祝してくれ、なほ引き止めようとするに係らず、九月二日早く歴史、  
文學、繪畫、音樂、佳景の國としてあてがれてゐるイタリアへ行きたいので、唯一  
人、狸の皮の背囊を背負ひ時間馬車に飛乗り、二十四哩半の長途を一向に急ぎ、レ  
エゲンスブルヒ Regensburg に着き、エズイット教團俱樂部の歌劇を観などして一  
日休憩し、ミュンヘン Muenchen にルーベンス Rubens のスケッチを賞し、インス  
ブルック Innsbruck に、風光を賞し、道々植物を見て携帯してゐるリンネの植物名  
彙を覗いた。ワルヘン湖畔の龍膽<sup>うんたう</sup>、燈心草などに注意を拂ひ、石灰岩に就ても彼は  
眼を輝した。ブレンネル Brenner やロエレド Rouerelo やガルダ Garda や、バル  
ドリノ Bardolino を經、九月十四日、エロナ Verona に、圓形劇場を見た、こゝで

國境偵察に來たものと邪推せられたが、幸にフランクフルトに居たことの在るグレゴリオといふ人があつて、フランクフルトの事を尋ねたので、それに答へ得たから、嫌疑が晴れた。チツイアン Titan の聖母などは、彼の目を喜ばせた。エロナからキチエンツア Vicenza に行き、バルラデオ Palladio の建築を愛し、オリムピアの劇場を見、二十六日にはパツア Padua に入つた。マンテナア Mantegna の油畫が氣に入つた。九月二十八日エニス Venesia に入り、劇場、美術、建築物とを見廻り、ゴンドラに乗り、船頭に「タツソオ」と「アリオスト」を謠はせて聴き、パウロ・エロネーゼの書をピサニ・モレッツタの宮殿に見て、その技の非凡なるを愛し、初めて海を見て喜び、貝類特にバテルラについて注目し、その他に愉快な時を費し、十月十四日まで居た。フェルララ Ferrara に行き、タツソオの跡を尋ねようと楽しんでゐたのに、牢屋を問うても案内者が、違つたものをそれだと云つたりするので、氣を悪くした。ボロニヤ Bologna に、ラファエロ Raffaello のチエチリア Caecilia や、聖

アガタを見て藝術の力に打たれ、硫酸重土りゅうさんじゅうつちに注意し、ヘルジア Perugia を經てアツシシ Assisi に至り、ミネルワ Mineva 女神の殿堂を飽かず眺めた。

十一月一日、長い間、あこがれてゐた羅馬 Rome に到着し心が静まつたと旅行記に書いて居る。彼の父が羅馬の全景圖を玄關に掛けてゐた、それが眼前に實際展開したのを見た時の彼の喜は少くなかつた。

自然と藝術を見る眼の肥えた上に彼を愛することの深いチツシユバイン Trichbein 氏を案内人に藝術品をはじめ、種々のものを視察して廻り、羅馬は大學校に比すべく、その一日のことでも語り盡されないから沈黙した方が宜いと云つて居る。ミケランゼロ Michelangelo の最終の審判に驚嘆し、ユノ Juno 女神（エピテルの妹にして妻）の頭の模造を得て歡喜し、その美しさは筆舌を超越することホメロスの詩の如しと書いて居る。

ジウスチニアニ宮殿にあるミネルワ像に對し口を極めて賞讃し、そこを去り難に

したので、そこに在つた婦人がこれに肖た戀人でもあるのかと問ふたとも書いて居る。マイラントに在るレオナルド・ダ・キンチ Leonardo da Vinci の最後の晩餐の縮圖を愛した。其の頃、散文イフイゲニエを詩に改作した。

——八十七年二月二十五日ナポリ Napoli に行き、こゝに在ればローマが戀しくないと云つて居る。カセルタで、英國公使キリアム・ハミルトンと云ふ老騎士が、二十歳ばかりの英國美人と楽しく生活してゐるのを見、その肩掛踊の巧な Syria に、魂を奪はれ、こゝでこの人のやうに、世間を忘れ自己を忘れ風光を愛し美人を寵して居たら面白からうと『伊太利旅行』<sup>イタリエンツシエ、ライゼ</sup>に書いて居る。三月二十日ナポリを立ち、五日目にシチリヤ Sicilia 島のパレルモ Palermo に入り、オレンジの樹夾竹桃の間に再び、彼の前に生きて來たかのホメロスのオデッセイを讀んだ。そこで或日一人の男が彼に向つて、ワイマルで雨を降らせ又日を照らせたエルテルを作つた男はどうなつたかと問ふやうなをかしいこともあつた。四月十八日パレルモを去り、アル

カモ、シャツカ、ジルジエンチ、カタニアを経メツシナ Messina に行き、五月十一日ナポリに向けて船を出した。十四日ナポリに到着し、散文タツソオを詩に作り直し、六月六日、羅馬へ再び入り、翌年の四月二十二日まで留つて居て繪も學んだ。エグモントも書き終つた。——八十七年の九月頃、カステル・ガンドルフオ Castel Gandolfo で、マツダレナ・リツジイ Maddalena Riggio といふ女を見て、子供のやうに、輕卒に戀に落ちた。所が此の女には既に許婚者があるのだと解つた。女は病氣になつてゐた間、許婚者と和せず争ひがあつた。病氣が治つてゲエテと會つた折には女は自由の體になつてゐた。併しゲエテはその女を犯したか、どうだか。シユタイン夫人への手紙も次第に打解けなくなつた。歸途バルマ、ミラノ、アウグスブルヒを経て——八十八年六月十八日ワイマルに歸つた。

この旅行に彼は名を秘して、出かけた。伊太利にも彼の名を知つて居て、彼の作物を愛讀して居るものもあるのだから、名乗れば、歓迎せられることは必定である



が、彼はそれを避けた。無論、知つてゐて、深く交際し、別れに望んで悲嘆した者も多かつた。

この伊太利旅行は、彼を楽しませしめ、奮發せしめ、一層の潤ひと熱と光と廣さを彼に添加した。新生を興へたとも謂はれる。

『伊太利旅行』 *Italianische Reise* といふ書物は、彼がシユタイン夫人その他へ通信したものをワイマルに歸つてから集め、一千八百十四年から十七年までに、自分の日記からもそれに書き加へて、二巻に分つて出したものである。

### クリスチアアネの貞淑、シルレルの覇氣

伊太利から歸つて以來、二度と其の旅ほど長くワイマルを去つて居ることはなかつた。伊太利旅行は、彼の精神的生活を豊富にした、誘惑するやうな美しさを有する天然と、天才の遺した高い藝術とに接觸したので、詩人としての力の自覺を新に強めた。今まで試みなかつた方面や試みむとしてゐるものに刺戟を得て緊張を感じた。

彼は、伊太利へ出立する前のやうな繁劇な政務に再び身を投じ込んだらば、彼の本領を發揮すべき作品を作るに暇がないから、何とかしなければならぬと思つて居た。その心持を知つて居り、且つ、この名高き、才能豊かな友人の、成すあるを信じて居る公爵は、彼の、政府の重臣たる禮遇をば保留して置いて、事實は、至つて開散ならしめるやうに待遇した。ゲエテはこれを喜んだ。そして、自分が好きでも

あり、關係してゐて自己の研究に便利な、イルメナウの鑛山事業の支揮と、エナ大  
學の監理に於けるワイマル公國の權利とを托されたのを受けた。

ゲエテは、シユタイン夫人との交情を十分維持するつもりで歸つた。然るに二年  
前互に抱いたやうな心持が起らない。凡そ二年の間、心の底を打開けて、彼女に親  
んだ習慣を離れて居り、心奥に新理想を抱いて歸つた彼にはシユタインが、どうも  
沈滞してゐるやうに思はれ、若々しい生々した女を見て來た眼には、自分より年長  
の、四十四歳の彼女を血を湧かすに足らずと感じた。婦人の本能を以て、シユタイ  
ン夫人は、彼の變化を看破し、彼がまだ判然と彼を好まない態度を見せない前に怨  
みを云はないでは已まなかつた。彼は、冷淡なのはお前の方だと反對した。誤解が  
高まり、兩方で、到底以前のやうな仲に回復する事は覺束ないと思ふに至つた。

ワイマルに歸つてから四週間はど経過した時、一日、公園を散歩して居ると、二  
十二歳ばかりの美しい女が接近した。その女は、兄からの嘆願書を齎したのであつ

て、その名を、クリスチアアネ・ヴルピウス *Christiane Vulpius* と云ひ、兄は、エナ  
に學んだ後、詩集を出したこともあり、文筆に依つて、妹達を養はうとしてゐるも  
のであり、ゲエテの援助を願つたのであつた。その書面を見て、その兄に便宜を與  
へようと思つたが、<sup>メッセジ</sup>信書よりも、<sup>メッセンダヤ</sup>使者が、遙に有力であつた。その娘は、脊は高い  
とは云へないが、姿態が美しく、鮮かなやさしい顔で、正直さうに、心に曇りがな  
さうで、美しい青い眼に、生々した表情があつた。詩人は、早くも心を動かした。  
そしてこれが縁の緒になり、後に正妻にするに至つた。彼は、教會で早速、式を舉  
行しようともしなかつた。とは云へ、決して、この女を一時的慰みにするつもりで  
はなかつた。色々の、クリスチアアネには不利益な噂が高まつた。ワイマル宮廷の  
貴婦人達は、自分どもの間からで無くつて、大臣ともあらうものが、位置の下つた  
女を妻にすることを怪しみ、且つ嫉んだから、その當時の *Little-tattle* には、ゲエテ  
と、クリスチアアネのことを大抵口にしない日はなく、そして無學であらうとか、

何とか云つたのである。噂はどうであらうとも、實際に於て、善良貞實で、夫の温い愛情を最後まで保つた。詩人にしても彼女を得て、幸福を感じた。彼が家を離れでもすると長い手紙を彼女に送つた。それを彼女は大事に保存した。彼は植物上の發見について彼女に語つても、その話が、彼女の智力に甚しく不相應でないことを知つた。此の愛する女の爲めに『植物變形賦』を成した。詩人が色々な重要な事務を托した場合、彼女は、それに従つて、決斷、知覺、感情に於て貧弱で無く十分であることを示した。そして彼が希望するやうに家の者を親切と深慮とを以て堅く支配した。初めの程は、その女を公園の家即ち Gartenhaus に隠して置いたとは云へ、兩者の交情は人の知る所となり、——八十九年二三月頃シユタイン夫人の激怒となつた。レエニツシ Rhenish 浴場へ出立する前に、彼が數週間返事をなし得なかつた程、辛烈な手紙を寄せた。その時から、兩者間の間隙が、容易に緩和しさうにならなかつた。後日、再び、交際するやうになつたとは云へ、前の内面的接觸の密接は

勿論求められなかつた。シユタインは、多くの宮廷婦人達の同情を得た、但し注意すべきは、彼について苛酷に又、不人情に話す事の出来ない程ゲエテを知つて居る公爵夫人は非難しなかつた。

八十九年十二月にはクリスチアアネは、ゲエテの子アウグストを産んだ。

ゲエテは以前のやうに引切りなしの事務に悩まされることもなく、クリスチアアネを以て楽しい生活を充して行けるので、熱心に文學に従つた。

『羅馬悲歌集』に筆を執つた。集中詩人の側に并んで立つ美人は、羅馬でないワイマルに於けるクリスチアアネを描いたのである。前に記した如く『タツソ』を劇にすべく筆を着け、『伊太利旅行』にも筆を動かさせた。

——八十八年、八月、公爵未亡人アマリイは、伊太利へ向けて出立した。九月五日に、ゲエテは、ヘルデル Herder 夫人、シャルト Schardt 夫人等を伴ひ、コツホムル Kochberg に、シャルロット・フォン・シユタイン夫人を訪ねた。シユタイン

夫人の友人で、——八十三年以來ゲエテを知つて居る、シャルロット・フォン・レンゲフェルド Charlotte von Lengefeld も、コツホベルヒに來て居たので、ゲエテ等を歓迎した。この、ロットも、ワイマル交際社會の外員であつた。シャルロット・シユタインは、此の頃、ゲエテが、自分を餘り好かないと思つて居るので、クリスチアアネの事は確めなかつたが、冷淡に待遇した。シユタインの腹の中では、眞實に愛を語りに来るのなら、何も他の夫人を同伴しなくともいひ筈だと思つたからである。その冷淡な態度が、詩人を不愉快にした。併しゲエテ、自分にも、彼に對する心持の變化に氣付いて居た。彼は、持つて來た繪を見せたり、著作を朗讀したりした。そして、七日に、ルドルシユタット Rudolstadt に密接して居る、フォルクステット Volkstedt の、レンゲフェルド家を、彼等が揃つて訪ねた。

レンゲフェルド家には、シャルロット(二十一歳)と母と、カロライネ Karoline と呼ぶ姉と三人で、文學を愛して、靜に平和な生活をして居た。カロライネも、妹も

ともに、ゲエテを崇拜してゐた。而して、此の妹は、シルレルを見た時から、シルレルを好み、互に愛し合つて、シルレルは、ゲエテが、レンゲフェルド家を訪問した際その家に客となつて居たので、圖らずも、此の不朽の兩詩人は、面會した。兩詩人は、間近く語り合つた。ゲエテは伊太利に就いて色々話した。然し、兩人の魂と魂とは觸れ合はなかつた。

シルレルは、『群盜』『フィエスコ』『權謀と戀』『ドン・カルロス』の著者として、相當に人に知られて居る自分に對して、又、曾て、ウエルテンベルヒ公爵の學校に在つて、ワイマル公と一緒に、學校設立紀念祭に臨んだ彼を見た以來、崇拜して、彼が伊太利旅行中に、クネエベルと、その公園の家に到つて、ゲエテが三十八歳の誕生日を祝つたことのある自分に對して、豫期してゐたほどの暖みを投げて呉れないことを感じた。然し乍ら、彼の偉大を認めないわけではなかつた。その嚴然たる態度を以て接し、馴々しく遇せられなかつたので、親しみ易いと感じなかつた。